

現地通信

チェンマイ大学

「ランナータイの歴史・
考古学セミナー」に出席して

桂 満 希 郎

I

今回のセミナーはチェンマイ大学人文学部の単独主催によるもので、同学部学部長のモーム・ルワン・トゥイ・チュムサーイ博士より京都大学東南アジア研究センター・バンコク連絡事務所あて代表を送るようにとの招待があったものである。あいにく歴史あるいは考古学専門の方が在タイしておられなかったため、比較的近い分野にある私が出席してはとの連絡を同事務所より受けて、結局チェンマイに出かけることになったのである。先にタイ国芸術局により開かれた2回にわたる歴史考古学関係のセミナー（第1回 1960年スコタイ；第2回 1967年チャイナート）¹⁾にくらべて、今回のそれは主催者が一大学の一学部という小さいものであったためか、かなり小じんまりした家族的な雰囲気のものであった。出席者も大して多くはなく、発表者および主催者側のスタッフを含めても約

1) 石井米雄「タイ国芸術局主催歴史考古学セミナーに参加して」『東南アジア研究』第5巻第1号、pp. 201~206, 1967.

200名くらいではないかと思う。また、芸術局による前2回のセミナーに比べると、いわゆる歴史・考古学の「大物」あるいは「長老」の顔ぶれがそろっていなかったという印象を受けるが、その反面、若い研究者および歴史・考古学を専門としないが関心を持っている人、あるいは北タイの郷土史家とでも言うべき人達がよくそろっていた点は面白い。出席者が少ないという点については、バンコクとチェンマイ間の旅費が自己負担になっている点も考えねばならないであろう。

題名の「ランナータイ」と言うのは、マンラーイ王がランプーンのハリプンチャイを征服しチェンマイに都を建てた仏暦19世紀より同25世紀に至るまでの約500年にわたる北タイ王朝を意味し、この意味でチェンマイ大学が本セミナーの主催者となったのはしごくもったいな事と言えよう。マンラーイ王以前にも北タイ一帯にタイ族が存在していたことはたしかであるが、少なくとも今回のセミナーに関するかぎり、「ランナータイ」と言うのは上記の約500年を指すものと見てよい。また地理的に言っても、同王朝の全盛期には現在の北タイだけでなくラオス、ビルマ等をはじめとする近隣諸国の一部をもその領土内に含んでいたのであるが、この点に関しても、セミナーの中心は現在の北タイ（チェンマイ、チェンラーイ、ランプーン、ランパーン、プレー、ナーン、メーホンソーンの7県）を指すものと解される。この地域は、チェンマイ、ランプーン、チェンセーン等をはじめとして、未だ未研究の遺跡が残っており、タイ国あるいはタイ族の歴史を研究するうえではなほ興味深いところであり、今回のセミナーが開かれたことは喜ぶべき事と言わねばならないであろう。私の行動は、10月19日チェンマイ

着、23日までチェンマイ大学に滞在、セミナーに出席、24日一日チェンマイを歩きまわった後、25日バンコクに帰着した。以下、プログラムを追ってセミナーの模様を略述していく。なお、ここで言う「考古学」(borannakhadii) の意味は石井教授の説明されたもの²⁾と同じである。

II

10月19日：10月ともなれば北タイはかなり気温が低く、空気も乾燥していて快適である。駅に着くと、2～3人の先生が大学からむかえに来てくれており、さっそくバスで大学に向かう。大学は町を出はずれた、ドーイ・ステープのふもとにあり、おどろくほど広いキャンパスに建物が点々とちらばっている。タイ国の大学で最も快適な地を占めていると言えよう。宿舎にあてられた第1男子寮に落ちつき、すぐ登録を行なう。バンコク・チェンマイ間の旅費、宿泊料1日10バーツ、屋外見学費30バーツ、登録費10バーツが自己負担になっており、その他の費用は大学の負担である。宿舎は3人用の大きな部屋を1人1室あたえられ、ぜいたくなほどスペースがある。窓からはキャンパスを一目で見渡すことができ、チェンマイ名物のドーイ・ステープも見え

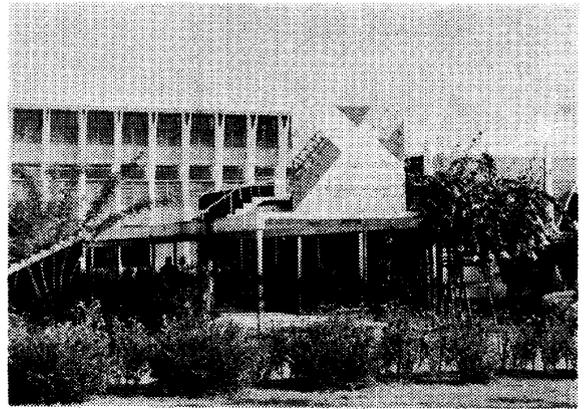


写真2 チェンマイ大学人文学部 セミナーの会場

る。夕方6時より学部長によるレセプションが人文学部の庭で開かれる。これを通じて色々な人に紹介されたが、予想以上に若い人達(特に女性)が多い。特にチェンマイ大学のスタッフは、まだ大学そのものが若いせいか、私と同年にチュラーロンコーン大学で勉強していた人達が多数見かけられたのはうれしかった。

10月20日：会場に当てられた人文学部講堂で総長の開会の挨拶があった後、9時よりさっそく本題に入る。Khachon Sukkaphanit氏の「ランナータイとスコータイおよびアユタヤとの歴史的関係」でスタートを切る。発表の要点は、(1)スコータイは当初にハリプンチャイから文字を習い、その後タマラーチャーリタイ王の頃にランナータイに対し逆輸入し広まったのではないかと。これをささえるものとして、母音記号aの代わりに同じ子音文字を二つ並べる方法はスコータイとハリプンチャイ以外には見出されないことをあげ、さらにマンラーイ王がハリプンチャイを征服した際 Phayaa Yiibaa はスコータイ方面にのがれ、その後間もなくスコータイ文字が現われたことを指摘している。また声調符号の見られるのはビルマのミャ・ゼーデー碑文のピュー語とスコータイ碑文のみであるが、この声調符号に関する問題は今後の



写真1 ドーイ・ステープよりチェンマイ大学を見おろす

2) Ibid.

研究のためサジェストするにとどまる。(2)セイロン派の仏教は南方よりスコタイを通じてランナータイに入っただけでなく、タトン、パガン、ランプーン、ランナータイというルートもあったにちがいない。だいたい、要点はこういったところであるが、これに対して問題の中心にふれるような質問あるいは反対意見は全然出なかった。次いで、休けいの後、グリスウォルド氏の「ランナータイの仏像」にうつる。最初に仏像一般に関するイコノグラフィの説明をし、次いでその理論にもとづいてスライドによる実例を見せながら、ランナータイの仏像の歴史の変遷を説明したものである。氏の考えはタイ国で一般に受け入れられている考えとは多少ことなっているので興味深かった。先に大学を訪問しておられた皇太后殿下の出発を見送るのに時間をさいたため質疑の時間がけずられたのは残念であった。午後は一同ワット・プラシンに出かけその広間で M. C. Saphatradit Ditsakun 教授の「ランナータイの建築」であるが、同教授が公務の都合上出席できなかったので、芸術局のソムチット氏が代理発表した。本ペーパーにおける建築と言うのは主としてチェディー(仏塔)を意味していると考えられるが、これに対して、チェディーのみを対象にすればどうしても材料不足となるので、もっと広い意味に解して都跡や城壁跡等も重要な資料として考慮に入れるべきではないかとの意見があった。また Khachon 氏より14世紀以前の遺跡があるかどうか、そしてウィエン・チャイプラカーンの位置については *Tammaan Singhanawat* (ตำนานสิงหนวัติ) の「チェンセーンより一晩歩いたところ」と言う個所からして、現在のフェーン近辺にあったという考えには、時間的・地理的にみて賛成しがたいという意味の発言があったが、この2点については今後の調査・研究に待たねばならないというところに落ち着く。この

後、ワット・チェディー・チェト・ヨード、ワット・ウモーンを見学し、第1日目終了となる。一般に、問題の核心にふれる発言がとぼしいように思われた。

10月21日：前日と同じ要領で、(1)ティン・ラティカノック教授の「ランナータイ時代の教育」、(2)プラサート・ナ・ナコーン博士の「マンラーイ王の法律」、(3)シンカ・ワンサイ氏の「ランナータイの詩」が順を追って進められる。(1)は当時の教育が寺で行われたために、主として男子の教育に話がしぼられる。教育課程、内容、先生となる僧侶の位による教授義務の分担から、一定の課程を終了した者に与えられる称号および彼らのたずさわる職業あるいは共同体で果たす役割等についての説明である。同教授の研究はチェンマイ文字による古文書および村の老人とのインタビューにもとづいて成されたものと考えられる。(2)は非常に興味深いものであるが、同博士も最初にことわったように、公務多忙のため準備時間を欠いたためか、原本の種類・経歴の説明があった後、法律の条文(現



写真3 ワット・プラボロムマタート・ランプーン

代タイ語に訳したもの)を読みあげるにとどまる。これは当時の社会その他を知る上で非常に面白いものと思われるが、後日この条文が印刷配布されるのが楽しみである。ただ、現代タイ語になおしてしまわずに原文のままあるいは両方を掲げて欲しいものである。(3)は北タイの地方文学で韻文を取りあげ、主としてカーオを説明したものであるが、实例を朗詠しながらの説明で、全員楽しく聞いた。しかし、地方文学という性格上、各地に散在する作品を収集・整理・分類(時代的および内容的に)するまでには至っていない。これは作品自体が広い地域にちらばっていること、作者が名前を書き残すことがほとんどないことを考えると、極めて困難な仕事と言わねばならないであろう。また、韻文の形式による分類のほかに、歌い方にも色々な形があり、同一の詩でも色々な調子で歌うことが出来るのであるが、実際に聞いてみると、意味は別として、その調子が日本の琵琶、狂言等の調子におどろくほど似ている。この最後の議題はワット・プラタート・ドーイステープにて行なわれた。

10月22日：朝からチェンマイを出て、並木道を通りぬけてランプーンに向かう。ランプーンの町は、自動車や人やサムローなどで混雑したチェンマイとはことなり、昼間でも不思議なほどひっそりとしている。まず、ワット・プラボロムマタート・ランプーンに着き、その集会室で Saeng Monwithuun 氏の「ランナータイにおける仏教の歴史」が始められる。発表の内容はランナータイにおける仏教史概説とでも言うべきものであったが、同じセイロン派の仏教でありながら中部タイと北部タイとではなぜ経文の読み方の調子がひどく異なるのかと言う質問があり、これに対して、同じ経文でも受け入れられた地方の言語が異なるとそれにつれて読み方の調子も異なってくると考えられるとの答えが

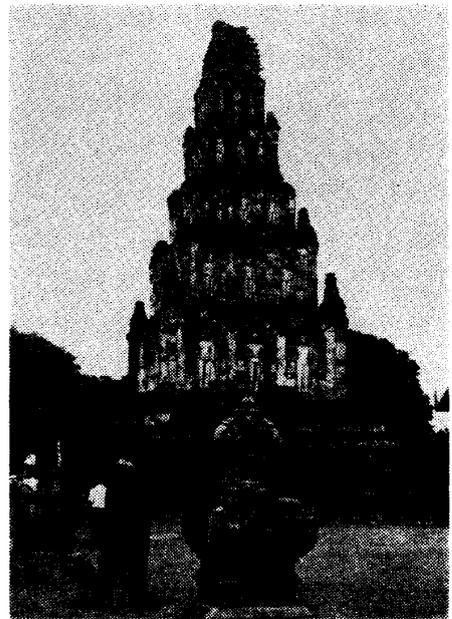


写真4 ワット・チャーマテーウィーのチェディー

あった。また大変興味深い質問として、ランナータイの人達をして仏教と深い結びつきを保たせているものは何であろうかというのがあったが、これに対して、Khachon 氏が子供の家庭における教育あるいはしつけが深く仏教に根ざしたものだからではなかろうかとの意見を出したが、あまり説得力はなかったようである。次いで Manit Wanliphoom 氏の「ハリプンチャイおよびウィエン・ターカーンにおける考古学上の遺跡」にうつり、話の要点はハリプンチャイの位置、建立者および統治者、ハリプンチャイの民族あるいは人種、ウィエン・ターカーンなどについて、最近調査された遺跡および自分の調査の結果にもとづいての発表であるが、代理発表であったため、主としてハリプンチャイの民族、人種、ウィエン・ターカーンに話が限られる。ハリプンチャイの先住者はいちおうコームについてモーンということになっているが、決定的な結論はまだ出ていない。ウィエン・ターカーンの周辺には三つ四つのモーンの部落があり、古い城壁内にはタイ化した、または

ほとんどタイ化しているタイヤイの村があり、現在のランプーンにもモーンの村が多数存在するが、これらの村に当たってみると、比較的新しい時代に移って来たものと、古くから住みついでいてタイ化したものとの二つに分かれる。そこで、ピン川流域の住民が何民族であったかという研究を、ボンサーワダーン、タムナンの面からだけではなく、実地調査の面からも進めるべきではないかとの発言がティン教授によってなされた。ウィエン・ターカーンと言うのは、1965年芸術大学のチームにより調査された都跡で、490m×740mの広さを持ち、12世紀のころのハリブンチャイ遺跡としてランプーンに次ぐ重要な所とされているが、細部に関しては、今後の調査研究に待たねばならない。

10月23日：最後の発表は、歴史とは直接の関係はないが、Sanguan Chootisnkkharat 氏の「ランナータイの歴史研究における諸問題」で、調査研究のための費用、文献の収集と研究、遺跡類の保存・盗難防止等に関する話である。調査研究の費用という点について、自分の国のことでありながら何かや

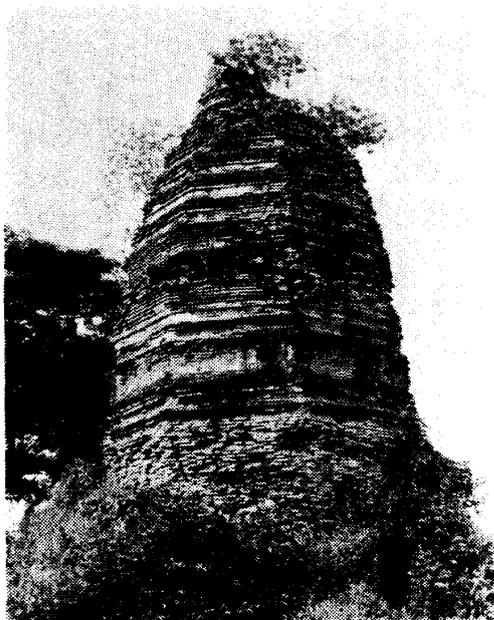


写真5 ウィエン・ターカーンのチェディー



写真6 ワット・ブラユーン

る度に外国の財団から金をもらわなければならないのは情ないことで、それくらい自分の力で出来ないものだろうかと言う発言があったが、これに対して、外国の財団が援助してくれるのは、歴史的遺跡というのはタイだけのものではなく全人類のものだという考え方にもとづいたものであり、またタイだけでやっても大したことは出来ないから、いまのところ援助を受けるのも仕方がないという意見が出た。文献については、古いチェンマイ文字で書かれた貴重な資料が各地にちらばっているが、これらを一所に集めて整理分類し保存するためには、どうしてもチェンマイ文字の知識が必要となるが、この役目はチェンマイ大学が引き受けるべきだとの意見が出る。これに対し、同大学ではマスターコースの歴史の一科目としてチェンマイ文字の授業を行ない、ひいては北タイの文献を収集整理し図書室を作る計画がある旨、ティン教授より回答があった。その他、歴史的遺跡の盗難・破壊等に関して、これは現在の初等教育における歴史科目を改める必要がある。今のそれは、歴史と言えは年代と人名の暗記にとどまり何

のおもしろ味もないものとなっているが、これをもっと自分達の歴史に対して興味をいだかせるような性格のものに改める必要があるとの発言があった。また新しい都市建設のために遺跡が犠牲にされることに対する強い反対の態度が示された。こういったセミナー等の機会には都市建設に関する役人をも呼ぶべきだと言う意見も出た。最後の日には Sanguan 氏の発表のみで午前中全部を費やし、その後すぐ、学部長による閉会の辞があり、希望者のみパー・ダムへピクニックに出かけて終了となる。

III

今回のセミナーに出席して感じられたことを記して最後の章としたい。いつもよく言われることではあるが、発表者に対する若い人達の意見発表が少ない。これは彼らが自分自身の考えあるいは発表された内容に対する疑問や反対意見を持っていないと言うことではなく、そうすることが礼に反するとでもいう風潮があると言った方がいいだろう。休けい時間には盛んに色々な意見が取りかわされ、「タイの学会では自分より上の人に対して反対意見をのべる者がいないのは困ったものだ。」という意味の言葉はよく聞くのであるが、いざという時になると、そう言っている人達自身もたいていは沈黙を守ってしまうのである。また、全体を通じて、発表内容の核心に触れるような質問・意見等が案外少なく、どちらかと言えば二次的な末梢事についての発言が多く、中にはかなりな「トンチンカン」もあった。例えば、ティン教授の発表において、ラーナータイの教育そのものについての発言よりも、「[laannaathaj] は元は [láannaathaj]」であったかどうかということにかなりの時間を費やした。最後のセッションで、反省として、「もっと中心問題を論ずるべき

で、直接関係ない小さな事柄は大して重要ではない。」という意味の発言があったが、これに対して「小さな事でも重要だ」という反対意見が案外多かった。この点については、出席者のほうに発表者と同程度の予備知識が欠けていることに原因があるかもしれない。ペーパーは開会前日に配布されたが、もう少し早くから配布して、各出席者が内容について質問なり意見なりを持つに充分なだけの余裕を与えれば、かなり防ぐことが出来るのではなかろうか。

先にものべたように、今回はタイ国における歴史あるいは考古学の「大物」とでもいうべき人達が比較的少なく、そのかわり他の分野を職業とするかたわら個人的にこつこつと研究を進めている、いわば「郷土史家」とでもいう人達が多かった。これらの人達はいわゆる「大物」のように華やかさはないけれども、その分野においてはいわゆる「生き字引」のような人達が多く、こういった人達と話をする機会を持てたことは非常な幸いであった。また、直接セミナー自体とは関係ないが、これを機会に、色々な人と知り合い、話をする事が出来たのは大変貴重なことと言わねばならない。宿舎は1人1部屋与えられたのであるが、毎晩数人が寄り集っておそくまで話し込んだために、最後の日には昼間からいねむりが出る始末であった。歴史のみに限らずどの研究にしろ、その国の人達とつき合い話をするということは、本を読んだり調査に出かけたりするにおとらず大事なことだと思う。

最後に、今回のセミナー出席に関して、チェンマイ大学人文学部、京都大学東南アジア研究センター・バンコク連絡事務所に対し、深く感謝する。

1967年11月6日

バンコクにて

農業開発のためのユネスコ活動

— ユネスコ農業教育・
科学国際諮問委員会
第1回会議に出席して —

本 岡 武

ユネスコと農業開発

発展途上国の農業開発は今日の世界的課題である。この農業開発を進めるには多くの条件がある。たとえば、ニューヨークに本部をおく Agricultural Development Council の会長モーシャール博士は、発展途上国で農業を開発させるためにはつぎの諸条件が必要であることを指摘する。(Arthur T. Mosher, *Getting Agriculture Moving, Essentials for Development and Modernization*. Frederic A. Prager, New York, 1966.)

- (1) 農業開発の基本条件
 - i) 農産物販売のための市場の存在
 - ii) 農業技術の改善
 - iii) 農業生産資材の確保
 - iv) 農民への生産のための刺激
 - v) 交通通信の発達
- (2) 農業開発の促進条件
 - i) 農業開発のための教育
 - ii) 生産のための金融
 - iii) 農民活動の組織化
 - iv) 農地の改良と拡張
 - v) 農業開発のための国家計画

わたくしはこの開発条件の分類や規定には

かならずしも全面的に賛成するわけではない。しかし、少なくともこの規定で明らかなように、教育と技術（あるいは科学）とがここにあげられた10条件のうち二つを占めている。また農業開発を長期的に見るとき、教育と科学とにたいする投資の効果がきわめて高いことはすでに広く認められている。ところが、現実の発展途上国においてはこの教育や科学への投資という長期的な迂回生産的な開発方式をとるだけの資本と時間を欠いており、これがともすれば軽視されがちである。それだけに、農業開発の条件の育成にあたり、とくに教育と科学とにたいする外国からの援助が必要となる。

他方、国連は1960年代を「開発の十年 (Development Decade)」として積極的に発展途上国援助にのりだしている。国連諸機関のうちで、教育・科学・文化をとりあつかうユネスコはいずれかという発展途上国の経済発展の必要性の認識が十分でなく、したがってその援助活動が他の機関にくらべおくられていたように見受けられる。ユネスコの低開発国にたいする活動は、学校教育を中心とする教育制度の改善に重点をおいてきた。それはユネスコとしては当然であろう。しかし、「南北対立」の激化にともない、「南北問題」に焦点をあわせ、開発を意識しての活動の必要がせまられてきた。

1962年の第12回総会ではじめて農業・商業・工業などの技術および職業教育にたいする勧告が採択され、農業教育にユネスコが積極的にとりかかることになった。1964年第13回総会で農業教育・科学部が設置され、またそのプログラムのための作業部会が設けられ、この部会の結論が1966年に提出された。1967年5月の第76回執行委員会で農業教育・科学の国際諮問委員会が設けられ、ユネスコが南北問題とくにその対策としての農業開発を意識し、そのうえでの農業教育・科学とをユネス

コノ立場から積極的にとりあげることになったわけである。これはユネスコとしてまことに喜ばしい動きであると思われる。

**ユネスコ農業教育・科学国際諮問
委員会第1回会議**

国際諮問委員会はずきの委員から構成された。

Prof. Roger Blais, Head, Institute National Agronomique, Paris (France)

Prof. V. Kas, Dean, Faculty of Agronomy, Prague Agricultural University, Prague (Czechoslovakia)

Prof. V. Krasota, Chief, Department of Agricultural Education, Ministry of Agriculture, Moscow (U. S. S. R.)

Prof. Pascal Lissouba, Centre d'Enseignement Supérieur de Brazzaville, Brazzaville, Brazzaville (Congo)

Dr. G. El Mallah, Dean, Faculty of Agriculture, Alexandria University, Alexandria (U. A. R.)

Dr. Angel Marzocca, Director, Departamento de Especificación, Centro Nacional de Investigaciones Agropecuaria, Buenos Aires (Argentina)

Prof. Takeshi Motooka, Kyoto University, Kyoto (Japan)

Prof. M. A. Nour, Dean, Faculty of Agriculture, University of Khartoum, Khartoum (Sudan)

Dr. B. P. Pal, Director-General, Indian Council of Agricultural Research, New Delhi (India)

Prof. Armando Samper, Director-General, Inter-American Institute of Agricultural Sciences, San José (Costa Rica)

Sir William Slater, Formerly Secretary, Agricultural Research Council, Fittle-

worth-Sussex (U. K.)

Prof. Gordon I. Swanson, University of Minnesota, St. Paul, Minn. (U. S. A.)

この第1回会議は、1967年11月6日から10日までパリーのユネスコ本部でインドの Dr. Pal 以外の全委員が出席し、Sir Slater を議長に、Prof. Swanson を Rapporteur に選出して開催された。

とりあつかわれた議題は、

- (1) 現在までのユネスコの農業教育・科学にかんする活動状況の検討
- (2) これからの事業目的と優先権
- (3) 事業計画の枠ぐみ
- (4) 事業実施の枠ぐみ

である。

この会議の概要についてはすでに発表したので(日本ユネスコ国内委員会『ユネスコ資料』17号, 1968),ここでは重複をさけたい。また会議の正式の報告については Final Report of the 1st Session of the UNESCO International Advisory Committee on Agricultural Education and Science が公刊されている。討議の内容がこれによってもうかがえよう。

会議の印象

ここでは会議の内容よりもこの会議における印象、それをとおしてのユネスコのこれからの農業開発のための農業教育・科学についての私見を記しておきたい。

(1) これまでのユネスコの農業教育および科学をとおしての農業開発にかんする活動をとりまとめると(交渉中のものを除く),つぎのようになる。

i) スイスにある International Centre for Agricultural Education が熱帯地域の農業教員のために隔年セミナーを開催しているが、これにたいする援助。

ii) 小学校における農村教育のパイロッ



写真1 パリーのユネスコ本部

ト計画としてカメルーンの Yaoundé 教育大学での農村向け教員の訓練，ウガンダにおける村落開発総合研究の実施。

iii) 国連開発計画 (UNDP) の援助のもとでの農業教育改善。すなわち後期中等教育に農業教育を導入するためにフィリピンで Institute of Technology, 上級技術者育成のためにマリーで Rural Polytechnic Institute の設立，中級技術者と教員の養成をはかるためコロンビアで中等農業教育計画の設定。

iv) UNDP のもとでの農業教育および農村開発のための専門家調査団の派遣。すでにチリー，マレーシア，ブラザビルコンゴおよびセネガールに送られた。

v) 農村地域での情報伝播の比較研究をインドとコスタリカにおいて実施。

vi) ユネスコの農業開発に関連する事業としては，UNDP のもと6カ国での実験的識字計画 (Experimental World Literacy Programme)。ユネスコのコミュニケーション事業としてセネガールで農村成人教育

のための視聴覚教育の実施。ユネスコの教育計画財政部では農業教育の必要性を，自然資源部では農業に関連する科学をとりあげ，また科学教育部ではアフリカでの生物学パイロット計画をもつ。

vii) ユネスコは ILO と協同してマリーで農村訓練センターを設け，FAO と協同して Agricultural Education throughout the World の報告書を作成するとともに農業訓練における視聴覚方法を採用した。

以上がそのすべてである。これからして明らかのようにユネスコの農業開発のための仕事がかわめて低調である。またその事業がおどろくほど散発的であり，思いつきであるとも推察されよう。とにかくユネスコが農業開発にたいし，これまでほとんど関心がなかったことを如実に示している。もちろんそのこと自体にも問題があるが，それ以上にいま反省されなければならないのは，従来の諸事業についていささかも評価 (evaluation) がなされなかったことである。これは国連機関の援助活動に広く共通的に見られる点である。あらゆる援助活動は試行錯誤の道をたどるが，誤りをくりかえさないためには，evaluation が必要不可欠な条件になる。反省の上にはじめて前進がありうる。

(2) もともと教育計画は長期にわたって行なわれなければならない，総合的なものでなく



写真2 パリーのユネスコ本部庭園

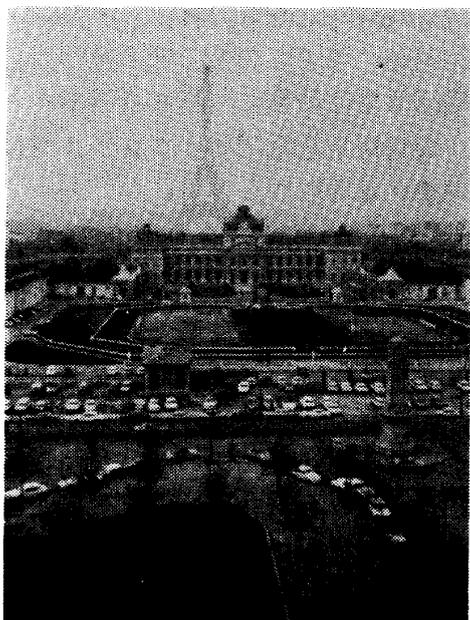


写真3 パリーユネスコ本部からの眺望

てはならない。にもかかわらず、あまりにも散発的であり、短期的であることの理由として、(i) ユネスコ予算が2カ年であること、(ii) ユネスコ農業教育・科学部の専門職員が部長をふくめて5人しかいないこと、(iii)部の年経費が約16万ドルにすぎないことなどの行政的障害があげられる。この障害的条件はたしかに認められよう。しかし、より大切なのは教育計画における総合性と長期性の重要なことをユネスコとして十分に認識することにある。教育の国際機関であるユネスコが、効果的な教育のための必要条件である長期性を軽視していることはどうしても納得できない。

(3) ユネスコの援助活動のための基礎をなすのは、低開発諸国の開発実態と教育との比較研究にあると思われる。というのは、この委員会で各委員の発言を聞いて低開発国間での開発段階のあまりにも甚だしい相違に驚いた。農業教育と科学は、それぞれの国の開発段階に対応して発展させられるべきである。そのためには「比較研究」が徹底的に行なわれなければならない。

(4) つぎにユネスコとしては、専門家派遣やパイロット計画を主として実施する。これらはいずれも部分的あるいは小規模なものである。大規模プロジェクトは実際上ほとんど行なわれていない。これまたユネスコの限られた予算とスタッフをもってしては、いたしかたないことであろう。大規模プロジェクトはユネスコだけでは賄えない。それぞれの国がみずから担当しうるものでなければならない。専門家派遣やパイロットプロジェクトは、いずれはその国が自力で行なう大規模プロジェクトに発展するであろうとの前提で実施されていると理解すべきである。しかしこれまでのところ、ユネスコがパイロットプロジェクトから手をひくと、それが「開店休業状態」になったり、雲散霧消してしまう実例が多い。たとえばタイ中央部の Cha Cheong Sao における教育制度改善を目的としたプロジェクトや北部ウドンにおける村落開発を目的とした TUFEC (Thailand UNESCO Fundamental Education Center) がそれである。それだけに、専門家派遣やパイロットプロジェクトを実施するにさいしては受入れ国側と十分な協調がなされなければならない。

(5) さらに農業教育と科学とにおいて、ユネスコが科学面よりも教育面をより重視している印象をうける。農業科学については基礎面と応用面とに分かれるが、その応用面においては農業技術と密接に関連する。この農業技術は、FAO (国連食糧農業機構) の直接に担当するところである。この意味でユネスコが農業に応用しうる基礎科学 (自然科学でいうと生物化学, 社会科学でいうと人間行動科学) の発展により積極的に貢献しうるが、FAO との分業の意味において有意義なのではないかと思われる。

(6) 農業開発のために、国連諸機関とくに FAO や ILO (国際労働機構) との密接な協調がはかられるべきである。この点現実には

どうも縄張り争いの傾向が強いように見受けられる。ことに農業教育については、ある国では教育省、ある国では農務省の所管になっている。教育省はユネスコと、農務省はFAOとむすびつく。それだけに農業教育の援助についてはユネスコとFAOとの競合がきわめて深刻な問題となるであろう。

さらにユネスコの内部においても、各部局がなんらかの程度で農業開発なり農村開発と関係をもつ。この部局間の協調の必要なことはいままでのまなかろう。

また、ユネスコが低開発国を援助する場合、それぞれの低開発国で実施されている二国間ベースでの援助と密接な連絡をはかるべきである。教育・文化援助についてはとくにフランスが熱心である。アメリカの対外援助も決して農村開発を軽視してはいない。ユネスコにかぎらず、あらゆる国際機関による援助は、これら二国間ベースの援助とできるだけ協調されるべきである。

これらの問題点は会議においても指摘されたところである。たとえその全面的な解決はひじょうにむずかしくても、ユネスコ活動の農業開発における実質的効果をあげるためには、これらの問題点がひとつずつ着実に解決されなければならない。

この会議でわたくしは、国際諮問委員会の性格、したがってその組織運営にも多くの問題があると感じた。とくに国際機関の基本的性格といったものについて考えさせられた。各委員が自分の体験、職場あるいは国益をもととして発言するきらいさえあった。委員のうち大学農学部長が多かっただけに、この会議がときにはDean Clubのようであった。

アジアからの出席委員はわたくしだけであったが、世界人口の6%を占めるにすぎないアフリカが11人の委員のうち3人を占めていた。そのためだけではなかろうが、会議はき

わめてアフリカ指向的であった。これはアフリカの国連加盟国が圧倒的に多くなったためでもあろうが、アフリカ諸国の発言が強いとどうしても全世界的でなくてアフリカ的な農業開発問題がとりあげられることになる。このことは、今後ひじょうに注意すべきではなかろうか。

日本の発展途上国とくに東南アジア諸国にたいする援助の責務が重大になってきている今日、ユネスコ活動に果たす日本の役割が大いに必要になってきたと思われる。そのためには、ユネスコの本部職員やプロジェクトあるいは専門家派遣事業への参加者が、日本からもっとふえるべきであろう。この意味で、この会議開催のときユネスコ農業教育科学部長として帯広畜産大学教授田島重雄博士が新しく着任されたことは、ひじょうに喜ばしいことである。

また、日本の農業教育と研究の実情をユネスコ関係者によく知らせて、日本の能力をユネスコ活動に浸透させることが大切であると思われた。これは、日本の農業教育と科学の水準が発展途上国のそれに適用されうる面を多分にもつからである。FAOにおいて日本農業の経験が高く評価されているが、(たとえばP.G.H. Barter, *Problems of Agricultural Development*, Genève, 1966, p. 30) ユネスコではまだそこまでいっていないように見受けられる。

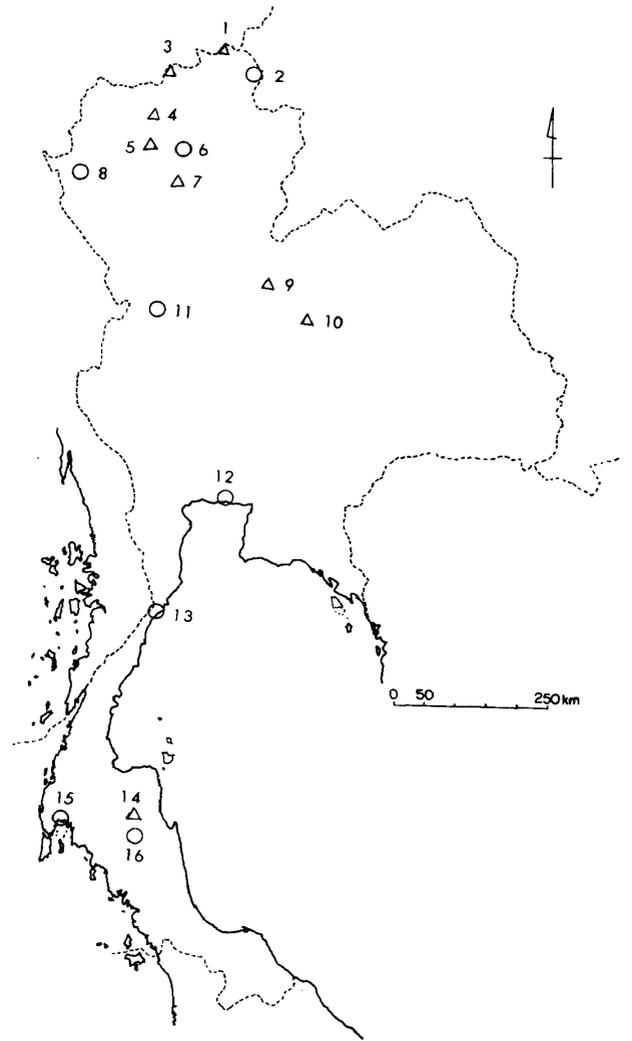
最後に、全世界を相手とするユネスコとしては、東南アジアにとくに重点をおくわけにはゆかない。そこで、ユネスコ活動はもちろん、ユネスコ活動以外をとおしても日本は東南アジア農業開発の重要な条件をなす農業教育と科学とに積極的に協力すべきであろう。この分野において日本が二国間ベースにおける援助にさいしては、できるだけユネスコと密接な連絡をとることが望ましい。

タイ国植物調査記

福岡誠行

再び訪れることになったタイ国は雨期の盛りであった。その降り方は予想に反して、日本の梅雨期のように何日も降り続く。このため私達の野外調査も思っていたほど楽なものではなかった。

雨の中の調査はお役所との折衝に当たられた芦田先生、自動車事故でバンコクに残ることを予儀なくされた田川先生と上野氏を除いてまず半島部へ向かう。限られた時間内にできるだけ能率を上げるため3班に分かれてそれぞれ別行動をとる。一組は淡水藻類を求めて Songkhla まで往復 3000 km のドライブを1週間ですされた平野先生、もう一組は前回多くの興味ある植物を採集できた Khao Luang へ再び登り、残る一組は清水氏を中心に石灰岩地帯の植物相の調査に当たる。私の参加した石灰岩チームは8月17日ビルマの国境とタイ湾にはさまれタイ国が東西に最も狭くなった所にある Huay Yang 周辺で活動を開始する。宿舎は浜辺にあり砂浜を洗う波音が静かに聞えてくるし、日の出る頃には虫の声もコーラスに加わる。ここは静かなだけにまた不便なところで食事をするにも 50 km 離れた Bang Saphan まで出向かなければならない。ただ、舗装された道路がほとんど一直



タイ国調査地

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 Doi Tung | 2 Chiang Khong |
| 3 Doi Pha Hom Pok | 4 Doi Chiang Dao |
| 5 Doi Suthep | 6 Huay Tak |
| 7 Doi Kun Than | 8 Mae Sariang |
| 9 Phu Miang | 10 Phu Kradung |
| 11 Lang Sang 国立公園 | |
| 12 Samui Prakan | 13 Huay Yang |
| 14 Khao Luang | 15 Phangnga |
| 16 Thung Song | |

線に続いていてそのうえ車が少ないから日本とは事情が異なる。時速 100 km で突走って30分後には食事がありつける。しかし夕食に費やされる2時間は仕事が全く中断されてしまうだけに痛かった。毎晩採集品を新聞紙に挟むだけで真夜中までかかり、さらに翌日ま

でもちこしたこともたびたびあった。この間、標本の乾燥もしなければならぬ。乾燥は段ボールに標本を挟み、下からラジュースであぶる加熱乾燥である。時々ラジュースのポンプを押さないで能率は著しく低下するし、逆に火が強すぎると標本が焦げたり燃えたりする。タイの人にまかせて2度ばかり火事を起こしてしまった。順調にゆけば早いもので2時間、遅いものでも2日あれば乾き上がる。それでも収穫の多い時はタバコを吸う暇もないほどの忙しさである。

Huay Yang 付近でひとときわ高い Khao Luang は 1494 m の頂上をビルマ国内に突き出している。遠くから眺めながら「登りたい」を連発したものである。この山の麓はおそまつながら観光地となっていて入口に茶店があり川に沿って薄暗い熱帯降雨林の中を迂回路が走っている。この道をそれて花崗岩の重なり合っている川底を進むと花崗岩の一枚岩にはばまれる。岩の上にはい上がると可憐な草花が咲き乱れている。熱帯では草本性植物に適した向陽地は少ない。このように大岩の上とか砂浜のように樹木の侵入できない土壌条件の所や山地民によって行なわれた焼畑の跡にしか草原ないしは草本性群落は発達しない。

さらに南下した Phangnga 付近は年間降雨量の最も多い地域の一つでゴムの植林も盛んである。雨量が多いだけに植物相も豊富で、Craib らによって記載された新種の原産地 type locality としても有名な所である。原産地の調査はこれからの研究にとって欠くことのできない基礎資料となるから未調査地域における採集とは違った意味の重要さがある。このあたりはそそり立った石灰岩の丘が見渡す限り重なり合っている。これらの岩山へ分け入ってみると、湿潤な森林の発達した所、比較的乾燥した山といったように同じ石灰岩から成り立っていても植生は変化に富んでいる。この付近には植物学者はもちろんのこと

現地の人達も分け入ったことのない丘が数えきれないほどある。道がない上に水が加わって、すぐ目の前の山にすら取り着くことができない。こんなありさまではタイ国植物相を明らかにしようとする私達の願いもどこまで達し得るか心もとない。

Phangnga の海岸には石灰岩の小島が多いとのことなので Phuket 島行きを変更して海へ出る。海面からそびえ立っている石灰岩の大絶壁からボートのエンジンの音がはねかえってくる。この音に驚いたのか森の中では野猿の群が騒いでいる。望遠鏡でのぞくと猿とともに沢山の花が視野に入ってくる。しかし、ボートを岸壁に近づけると花は20mも頭上にあり採集することができないことが常である。

マングローブの中を迂回しながら森の中へ入ると良く繁茂しているわりには採集品は少ない。Wallace の指摘にもあるように、日の光が良く当たる樹冠では花が咲き実がなっているのに陽光の届かない林床には花が少ない。それでは向陽の地へと一塊の岩からなる小島に上陸。着生ラン、キツネノマゴ科、イワタバコ科などの植物が多い。この海に突き出た石灰岩の上にも蟻が多く、樹木を採集するさい油断すると手といわず首といわずかみつかれる。

海岸での一日を最後に Phangnga 周辺の調査を切り上げ Thung Song へ行く。ここ



写真1 Phangnga の海岸

は Khao Luang のちょうど南に位置しているが植物相は予期していたほどおもしろいものではなかった。というよりおもしろい地域へ入り込めなかったのかも知れない。すぐ目の前にある山も連日の雨で近づくこともできない。ただ1本あるという道も水びたしとなった草原の中を通っているのではいたしかたない。ヒルの泳いでいる沼沢の中でウツボカズラやミミカキグサ属2〜3種などを手に入れ引き返す。

不案内な上に適当な地図もなく猟場を求めてジープを乗り回す。山頂に無線中継所があり頂上まで車道があると聞いて出掛けるが、せっかくの道路も許可が必要だという。日曜日のこととて係の人がいるはずもない。だが歩いて登るのはかまわないとのこと。せっかく来たのだからと細かくくだった石灰石で舗装された道路を歩く。先日のドライブの疲れと直射日光に痛めつけられ途中でへたばる。車一つ通らない道路だから石灰石のじゅうたんの上で寝そべっても何の心配もない。

このようにして山野をかけめぐった南部の旅も Thung Song 周辺での2日間の調査を最後に切りあげる。この間到達し得た最高高度は250mに過ぎない。しかし、前回おぎなりにしていた平地での資料収集ができたから、まずまずの成果を上げえたものと思う。帰路は案内者でもありジープの運転をお願いした林野庁の Anan 氏にすべてをまかせる。日本人3人はメコンを飲んだりマンゴスチンをほおぼったりしていただけであるが、8月30日バンコクに着いた時は一同完全にグロッキー状態であった。

Khao Luang 組はすでに次の調査地 Lang Sang 国立公園へ出発した後である。3日間のバンコクの休日も清水氏は石灰岩地帯の土壌分析に追われ、タイ国の苔類は100%採ったと豪語する北川氏は顕微鏡観察に余念がない。

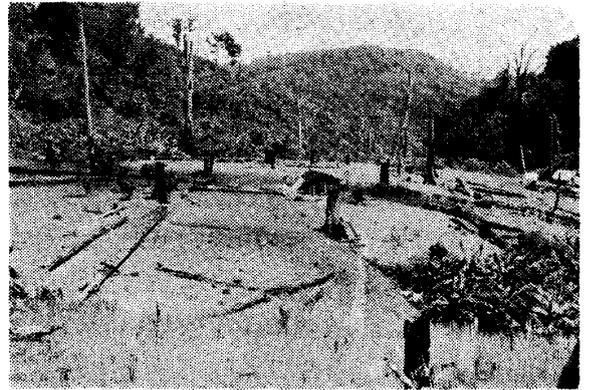


写真2 Phu Miang の焼畑。被害はまだ少ないが開墾は続けられている。

北部の調査は9月1日から6日まで平野先生他2名が Phu Kradung へ、残りの2人は汽車で Khun Tan へ向かう。9月3日 Khun Tan 駅で岩槻氏一行と合流し駅前広場で野営する。翌日はフタバガキ科の植物やチークの木などの優占する広葉落葉樹林の中を登る。この林は一度伐採されたのか樹木はまばらで見上げるような大木も散在するにすぎない。ヤンバルゴマ属 *Helicteres* spp. のような雑木は比較的よく茂っているが、草本類はきわめて少ない。落葉樹林帯における草本類の貧弱さは雨期乾期の別は特にないようである。やがてクリ属が現われ出すと落葉樹林は常緑樹を混生する混生林になる。混生林下では土壌もやや湿りけをおびてきて草本類や低木類も優勢になってくる。1000 m 付近の *Pinus merkusii* の松林の中に林野庁の宿舎がありここで世話になる。

宿泊所の裏にはタイ国内では最高峰 Doi Inthanon にしか知られていなかった紅熟するソクズ *Sambucus javanica* subsp. *chinensis* が群生している。この subsp. *chinensis* はヒマラヤ西部から中国、フィリピン、台湾と日本にまで分布している。一方、黒熟するソクズ subsp. *javanica* はインドシナ半島からマレーシア、インドネシアに分布している。これら両亜種の境界がどこにあるのか疑

問であったが、今回の調査でタイ国北部に位置することが明らかになった。しかし、両亜種ともタイ北部に点々と分布していることから考えると単純な境界線で示されるものではない。

植物採集はたとえ同じ場所でも季節を変えて訪れる必要がある。このことは再度 Doi Suthep を訪れて改めて感じた。前回果実をつけていたものが今回花を咲かせていた。枯れていた着生シダは青々としている。しかし、*Viburnum cylindricum* やソクズのように花期が特になく年中開花結実しているような植物も多い。

採集の方法にも色々あるが車の利用は便利である。ゆっくり車を走らせながら花を見つけると飛び出してゆく。集めたものは車につめ込むから持ち運びの労はずいぶんはぶける。Doi Suthep や Mae Sariang などこの方法を使った。しかし、タイ人の運転は速度が速すぎて思うようにいかない。速度を下げてもらってもいつの間にか 60km, 80km と上がっている。やっと止まった時には 100m も後戻りしなければならぬこともしばしばある。直射日光の中を歩いたり車窓から虎視眈々獲物を狙っていると意外と疲れる。

楽しみにしていた国境沿いの山もいくつか登った。Doi Pha Hom Pok はビルマとの国境にある。麓の部落 Ban Mae Sao までは牛車にゆられて行く。右に左にと傾く時は思わず身が引き締まる。泥水の中を通ると牛の尾で泥水をふりかけられ決して乗心地の良いものではない。Ban Mae Sao に着いたのはやっと昼になったにすぎなかったが荷物を運ぶ馬が集まらず学校の廊下で 1 泊する。この電灯もない村で英語を話す婆さんに出会ったのには驚いた。麻薬のことを聞いたら誰がのみたいのかと言っていた。

翌日はかび臭いそうめんを食べ、うんざりするほど長いアプローチに行く。雨の上に荷

物を持たせた 8 頭の馬の通った後はひどいぬかるみである。この平坦な小道を 2 時間も歩くとやがて坂道となる。高度もぐんぐん増し、水筒の水もすぐ底をついてしまう。後は傘をつたわる雨水を集めて渴きをいやす。尾根道に出ると混生林は焼畑跡の荒地と化す。単調な荒地の中を行くと霧の中に薄気味悪い部落が現われる。下りて行くと馬が疲れたからここで泊るという。異国のこととて事情がわからず行程はいつも相手まかせである。翌日は 2 時間ほど進んだジャガイモ畑でテントを張ることになるのだから時間の浪費もはなはだしい。

2000m を越えるとジャガイモ畑はスゲやキケマン属などの群生している湿地が現われ、陵線を越えると美しい蘚苔林になる。山地民さえ入っていなければこの山も Doi Inthanon と同じようにおもしろかったらと思うと残念である。この後登った Doi Thung や Phu Miang でも、Doi Pha Hom Pok ほどひどくはなかったが、焼畑の被害をこおむっていた。

山地民対策にはタイ国政府も頭を痛めているらしく、Tung Salaeng Luang 国立公園では軍隊まで出動して山地民の取締りに当たっている。この取締りはヘリコプターまで飛ばす大げさなものであるが成果のほうははかばかしくないようであった。Phu Miang で

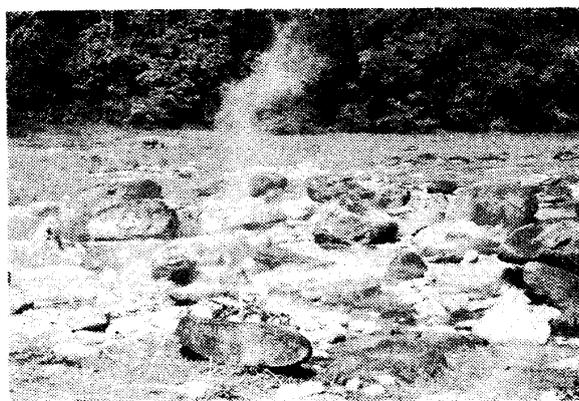


写真3 Fan 効外の温泉

も中腹の山地民の部落に大金を投じてコントロールを試みている。この部落には自家発電装置があり、各家庭には電灯がとまっている。また、立派な診療所もある。そのうえ、北歐から牛を輸入して牧畜を奨励している。このような力の入れ方にもかかわらず畑の作れそうな平坦地にはほとんど森林は残っていない。最高峯の Phu Lom Loh では一組の若い夫婦が開墾に精を出していたから、この山もまだまだ荒れていくことだろう。

このような荒廃した山巡りも Phu Miang を最後に終わる。1965年11月から1966年2月にかけての乾期と今回の1967年8月10日から10月11日にかけての雨期の調査によって基礎資料はある程度集め得た。しかし、広大な東北タイの地域には全く足を入れていない。季節的にも乾期の終りから雨期の初めにかけての調査が欠けている。

私達の資料とは別に、タイ国には林野庁所属の Forest Herbarium と農林省の標本庫を合わせて約10万点の標本が収められている。前者は Tem 氏や近年外国人によって集められた資料が、後者は Kerr らによって収集され Craib らによって研究された標本が中心である。Craib らは今世紀前半ですでに5万点の標本を基礎に仕事をしていたのである。したがって、彼らの研究を批判してゆくためにはまだまだ資料の集積が必要であり、そのためにはタイ国の研究者にたよらねばならないだろう。

さらに、標本を基にした仕事の上立って熱帯における種の分化や移住の問題を含めて植物相を史的変遷の結果として解明するためには熱帯における植物の生活を理解することが必要である。このような観点から、従来のような短期間の観光旅行的調査方法には疑問がある。

マラヤにおける植物調査

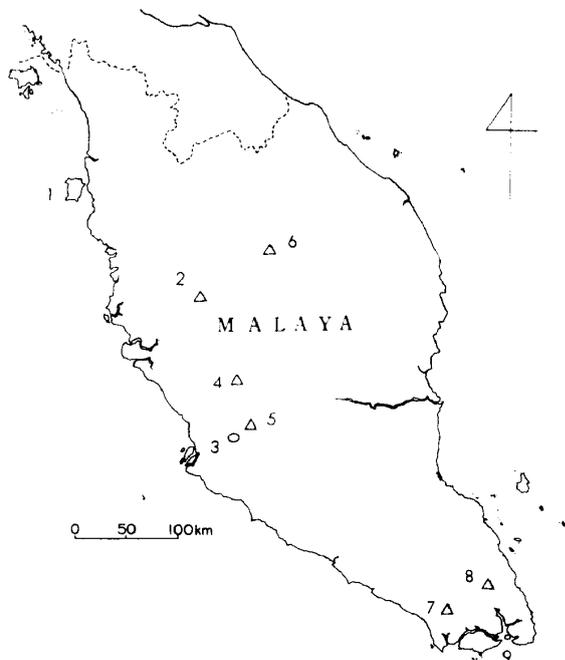
岩 槻 邦 男

2カ月を越えるタイでの仕事を終えてマラヤへ移動してきた時、5人に減った一行はそれぞれに相当量の疲れを背負いこんでいた。10月11日、清水・布藤、岩槻の3人はバンコクから空路クアラルンプールに着き、空港でマラヤ大学の Stone 博士の出迎えを受ける。早速、シンガポール経由で届けられていた荷物の引取りのために税関へ行ったりしてから、夕方になってやっとマラヤ大学を訪ね、夜は Stone 夫妻と会食。翌12日朝、例のように荷物の山に埋まってペナンへ向かう汽車に乗り込む。一方、北川・福岡の両人は、11日夕方、大量の荷物と共にバンコク駅を立つ国際列車の客となって、26時間余の旅をする。そして、不案内な土地を右往左往してペナンで一行が落ち合って宿に着いたのは、12日の夜もずい分遅くなってからだった。

13日の午前中はゆっくり休息し、午後、ペナン植物園へ行く。ここはシンガポールと並んでイギリス植民地時代からの植物園で、Stone さんにも、ペナンの仕事についてはここでよく打ち合わせをしておくのがよいと示唆されていた。園長の Cheang Kok Choy 氏は2日後にはエジンバラへ出かけるというところだったが、私どもの植物調査にも好意的

で、職員の一人を案内に同行させて下さることになった。

調査の最初の目的地をペナンに選んだのは、ここがマラヤで一番古くから植物の調べられているところで、命名の基礎となる基準標本が沢山採られているところだからである。植物相の研究をするためには、これまで知られていないところの調査をして新しい知識を得ねばならぬことは当然のことであるが、日本



マラヤにおける調査地

- 1 ペナン 2 カメロン高地 3 クアラルンプール
- 4 フレーザー丘 5 ウルカリ山
- 6 グアムサン 7 プライ山 8 パンティ山
- 9 シンガポール

のように熱帯での植物相調査では欧米に遅れをとっているところでは、基準標本の採られたところで良い資料を収集して、既知の種類についての確実な知識を得ることがまず必要なことなのである。私どももその常道に則して、研究が比較的進んでいるマラヤでは、まずペナンへ赴いたという次第である。

ペナンに植物園の開かれたのは古い話で、1786年に東印度会社が、それまでオランダが



写真1 ウツボカズラ的一种（ペナン丘）——食虫植物のこの類の植物はマラヤではごく普通のもので種類数も多い。

独占していた香辛料栽培に挑戦すべく、その栽培園を作ったのが、この植物園の始まりになるという。1794年に Christopher Smith という人が植物研究者として専任職員となり、植物の収集を開始する。続いて、1796年頃、植物園として一般に公開されるようになった。その後、1806年頃にはいったん売りに出された記録もあるが、徐々に内容も豊かになって、今日では園芸植物などを主としたこの地方の代表的な植物園となっている。独立後はマラヤの国立植物園として、年中無休で無料公開されている。19世紀末から、マレイ半島の各地に植物収集のための調査隊を派遣したが、腊葉標本はキューや大英博物館などに送付し、ペナンには腊葉館は作っていない。Curtis の調査隊をはじめ、タイ国半島部に調査の足を伸ばしたものも多い。

14・15の両日はペナン丘を採集する。案内のインド人 Arumugam さんは山に詳しく、お陰で私どもの仕事は能率良く進められた。マラヤでは多くの人種に接することになった

が、一般にマラヤ人の行動の鈍重なのには参った。ペナンではマラヤ人の少年を通弁に雇っていたが、彼は徒らにマラヤ人をひいきにするだけで、働きは極めて悪かった。それに引きかえ、後にも経験することだったが、ここではインド人の動きが活発で、私どももいろいろと助けられるところがあった。マラヤ人に好意を感じたのは、タイでお役所仕事の鈍さに苦しめられていたせいか、役所の仕事が割合円滑に進行することだけだった。

16日は例によって収集品の整理や検討、さらに清水・福岡の両名は海岸付近の植物を調べに出かけたりする。

私どもの植物相調査のための現地での仕事にはいろんな目的が課されている。今度マラヤで私自身がやりたかったことは、タイ国シダ植物誌を編むために、タイにまで分布しているマレーシア要素の種類について、マラヤにおいてより詳しい生態観察を行ない、比較研究のための良い標本を充分に得ることであった。マラヤ自体のシダ植物相については、30余年間シンガポールに在職していた第一級のシダ類専門家 R. E. Holttum が詳しく調べており、この狭い一地域は熱帯のうちでは種類相の記載が最もよく進んでいるところの一つである。だからこそ、タイのものについての知見を、マラヤの種類と比較検討することに大切な意味がある訳である。私どものやる

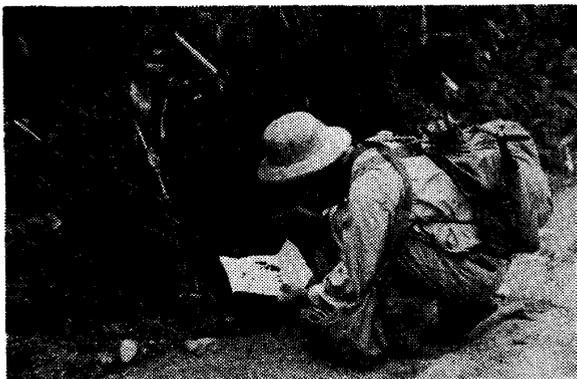


写真2 ペナン丘でコケを採集している北川尚史氏



写真3 ツルシダの一種 (カメロン高地)

野外観察は主要な外部形態の変異に関してだけで、詳細な形態の観察にまでは及ばない。それよりもむしろ、持ち帰って比較検討するための標本の収集に主力が置かれることになる。それも、自分達の手許に残して研究する資料だけでなく、交換によって外国の比較材料を入手するための重複標品もできるだけ沢山採集する。だから、昼の間は山を歩いて採集した上で、何百という標本を乾燥させるために、夜になってからは携帯用の乾燥器と取り組まねばならぬという仕儀になる。そのために、また、荷物が急速に膨れ上がって、あちこち動くことが非常に困難になる。

17日にはカメロン高地に移動し、18日から21日までの4日間をこの地域の調査に過す。ここは予期に違わず今回のマラヤの調査で一番実りの豊かなところで、22日に山を下った時には荷物の山に圧倒されんばかりだった。この高地は最高が6666フィート、宿をとったタナラタが5000フィートの高原で、茶畑や高原蔬菜で広範囲に開拓されているとはいえ、保護林の面積も広く、植物相も豊かであった。マレーシア要素の熱帯植物はタイ南部とはま

た違った景観を展開する。久し振りの涼しさに元気を回復した一同が、ここを先途と資料の収集に躍起となったのも当然のことだったのかもしれない。——保護林の山径をたどっている時に、幾度かピクニックのイギリス人達に会った。彼らの山歩きの姿には、心から自然の美を味読するものだけの知る満足感が溢れているようだった。女性だけの小人数の群もあった。その素直な自然への接し方には、自然の破壊者と共通する影など片鱗も見られないようだった。

22日にはいったんクアラランプールに戻ってきた。街へ戻ればそこにはいろんな雑用が待っている。大使館や移民局への連絡、京都との連絡、それにバンコクやシンガポールとの連絡。——24日に清水・北川の2人はクアラランプール北方約30kmのテンブル公園へ行き、25日には5人が揃って再びそこへ、26日にはフレーザー丘へ行き、28・29日はゴムバックからウルカリ山へのアプローチで採集を続け、30日には清水・北川・福岡の3人が時間を見てバツ洞付近へ出かける。この間、Stoneさんにずい分お世話になり、一日は

Anne Johnson 教授の指導で野外演習をしているマラヤ大学4年生の一行と暫時一緒になる。これはゴムバックのマラヤ大学野外研究センターで行なわれていたもので、二次林における森林の生産の遷移を毎年の資料を積み重ねて跡づけているものだった。十数名の男女学生が合宿して一週間調査を継続するということがあったが、泥まみれになりながら一同楽しそうな勉強ぶりだった。立ち寄ったところで、資料の同定を依頼されたりもしたが、時間があれば彼らともっとゆっくり交流してみたいと思った。

27日にはケポンの林業試験所へ行く。ここは、芦田先生らと事前に訪ねた際に、シンガポールの Chew 博士に、是非寄っておくように、と示唆されていたが、最初のクアラランプール滞在の間には訪問を実現できないで終わっていたところで、次の滞在の間には行けるように手配をしておいてほしいと、Stoneさんにもお願いしており、自分でも連絡していたところだった。——腊葉館主任の Whitmore 博士は折悪しく不在だったが、若い分類学者の Francis Ng 氏が好意的に対応して下さった。腊葉庫は、樹木の標本は古いものを含めて割合充実しているようだったが、全般の程度は決して高いものではなかったし、整理もそれほど行き届いてはいなかった。とはいえ、マラヤの調査を始めてから、山の中ばかりで、喉につかえたような気持だった疑問の幾つかを解くことができたのは愉快だった。また、午後には植物園を一巡したが、さすがに年が入っているだけあって、手入れもよく行き届いていた。フタバガキ科の喬木が集められているところでは、有用樹木の仲間にもふさわしく、40余種が植えられていた。これだけの規模の実験園を維持していくのは大変なようであるが、人件費の安い困らしく、腊葉の整理だけでも10人近い人を使っていたほどで、人手には不足をしていないようだった。



写真4 マトニア (ウルカリ山麓)

た。——ここを訪ねたお陰で、ジョホールの仕事は大変便利をした。Ngさんが、州の営林局に、細かい手配をして下さったからである。実際、タイでも私どもの仕事は大学関係とではなくて森林局と協同で進められたように、マラヤでももっと早くから林業試験所と連絡を緊密にしておくべきであったと、後から考えたりしたことだった。

清水・北川の2人はStone夫妻と一緒に、31日からケラントン州のグアムサンに出かけたが、残りの3名はクアラルンプールからの荷物の発送を終えたりなどしてから、11月1日にジョホールバルに移動した。ケポンからの連絡のお陰で、こちらでは一切が順調に運んで、2日はプライ山で、3日はパンテイ山で仕事をし、4日もコタインギ付近で調査を続けてから、夕方にはシンガポールへ移動し、空からやってきた清水・北川の2人と再びホテルで合流した。

シンガポールでは、採集品の後片付けをしながら、シンガポール植物園へ通って、腊葉庫で資料の検討を行なった。清水・北川の両名は7日に発って一路帰国の途に向かう。残った3人が、暑い腊葉庫に閉じこもって、時間一杯山積された標本や文献を繰っていった。シンガポール植物園は1822年頃から植物の収集を始めたらしいが、1859年の末から植物園として公開され、カルカタと並んで、キューを中心とする大英帝国の植物園の系列の東亜の代表であった。敷地内に原生林まで残されているが、市内で手狭なために、新しい土地に移す計画もあるとのことだった。腊葉庫は京大のものと同じくらいの規模であるが、マレーシアからインドシナ域までの標本が中心になっていて、私どもには非常に興味深いものだった。私自身はタイ国シダ植物誌の仕事の一環として、ここに収蔵されている標品を検討することを第1の目的としていた。今世紀前半に、わずかの間だけだったが正確な

資料を収集したE. Smith夫人の採集品と、ペナンとシンガポールの植物園が派遣した何回かの調査団が集めた主としてタイ半島部の採集品、それにタイ人採集家のWinitが採ったものも幾らか所蔵されていた。時間がわずかしかなかったので、一見して記録に移せるものは記録だけに止めたが、さらに詳細な検討を要するものについては、借覧するために選別するのが精一杯だった。

暑さにぐったりしたシンガポールの一週間を終えて、11日に再びバンコクへ戻る。ここでも、面倒な税関の手続きなどのために発送されずにいた荷物の処理をする傍ら、農林省生物学課の腊葉庫へ通う。ここは、タイの植物相調査史上決定的な役割を果たしたA. F. G. Kerrのために創設されたところで、彼の採集品が一通り揃えられている。タイ国内に限らず採集したKerrは、W. G. Craibなどの専門家に同定を委ねるべく、一組の標本を英国キューの王立植物園腊葉館へ送った。そして、そこから公表される結果を確認するための対照標本を、バンコクの農林省生物学課にも保存した。標本のうちには、どうしてもただ一枚しか手に入らないものもあるが、そういうものも、研究が進められている群ではキューへ届けられているらしい。けれども、シダ類のように、Kerrの収集品を詳しく研究する専門家のいなかった群のものについては、キューよりも完全な一組がここに残されている。キューの標本の幾つかの群のものを検討してみ、それをバンコクのものと比較した結果そういうことが明らかになり、私どもの仕事のためにも、この所蔵標本の詳細な検討が不可欠の仕事であることが確かめられた。今回の私のバンコク滞在は現地調査の事後処理のためのもので、時間的にも恵まれぬものではあったが、それでもKerrの収集品に一通り目を通すことができたのは幸いだった。この標本は貸出しが許されていないの

で、詳細な比較研究ができないのは遺憾なことではあるが、後日機会を得て、より詳しい検討を加えたいものと思っている。

以上の仕事を終えて、布藤・岩槻は11月18日に、福岡は24日に、それぞれ帰国し、4カ月になんなんとする今回の生物調査の現地での作業は終えられた。その間、収集した標本はマラヤのものでは、管束植物を約4000点、蘚苔類を1500包で、目下その整理に大奮となっているところである。

この現地調査は文部省科学研究費補助金（機関研究海外学術調査）によって遂行された。愉快で効果的な仕事を進めることができたのは、団長の芦田理学部長をはじめ、同行の皆さん方と最善の協同作業ができたからだと思っている。また、岩村前所長・本岡教授・バンコク連絡事務所の福井氏夫妻をはじめ東南アジア研究センターの皆さんにもずい分お世話になったし、マラヤ滞在中にはマラヤ大学のStone博士夫妻に大変御厄介をお掛けしてしまった。シンガポールでは植物園腊葉館の人達、就中Chew博士にいろんな援助を賜った。これらの方々の御援助がなければ私どもの仕事はその何分の一の成果もあげることではできなかったことと思う。ここに感謝の言葉を述べさせて載いて、現地報告の筆をおく。

（なお、今回の調査については、芦田先生の現地報告と、福岡さんのタイからの報告があり、本稿はその二つの記録の後、最後までを含めたものである。前二報と併せて見て載ければ幸いである。）

インドネシア留学から帰って

野 口 英 雄

1967年1年間のインドネシアのバンドン工科大学における留学から帰って、一般情勢、学校の様子そして私の研究テーマについて等簡単に報告します。

留 学 の 経 過

京都大学東南アジア研究センターの留学生としてバンドン工科大学 Institut Teknologi Bandung（通称 I. T. B. イーテーベー、後述の通り1921年に工業専門学校 Technisch Hoger School として創立され、現在理工学関係の7学部からなる）の芸術・計画学部に入席したのが1967年1月18日でした。そして帰国する1968年1月11日まで、主に建築と都市計画関係の勉強をしました。

最初留学の形式と留学機関について調査をしていた段階で、本岡武教授とプルダニア銀行の人々、石井米雄教授と外務省南東アジア課の人々に御世話になり、在東京インドネシア大使館の人々が非常に好意的に手続きを進めて下さったおかげで手続きは順調に進みました。バンドン工科大学の学長からも私の留学について公私にわたって協力する旨の通信を受けていましたし、事実よく御世話下さい

ました。そして東南アジア研究センター前所長岩村忍教授はじめ諸先生方、建築学教室の増田友也教授と福山敏男教授はじめ諸先生方には出発前と帰国後はもとより現地であっても研究上の注意深い御指導を下さいました。ついでながら現地では、バンドン工科大の諸先生友人達、バンドン市庁の都市計画課の人々、公共事業省研究機関 Regional Housing Center, 教育省国家文化財協会、ジャカルタ首都圏計画局の人々、等々には好意的に資料の提供を受け、研究に参加させていただきました。ジョクジャカルタ、ソロでは、友達の世話で民宿をしながらハマクブオノ家、マクヌガラン家等4家を見、周辺の仏教ヒンズー遺跡を見て回り、ディエン高原近くのウォノソボでも同じ好意を受けました。改めて御礼を述べます。

インドネシアの印象

私の目で見えたインドネシア、とくにジャワ島の一部の印象¹⁾をふり返ってみようと思います。

私がジャカルタに着いた1967年の1月は、1965年の動乱についてなお政治不安が続き、経済復興の見通しも立たなかった1966年に連続した時期でした。当時の情勢を反映したインフレと盗難には私も少し困りました。後に

- 1) インドネシアの特徴として、ジャワ島がその面積にして非常に狭いにもかかわらず、人口・経済・文化すべての面で集中し、外領の島々にもまして重要であることは多く指摘された事実です。しかし、例えばスマトラのメダンを中心とした北部とパレンバンを中心とした南部、セレベスのマカッサルを中心とした南部等々の地方は非常にひらけているということです。特にスマトラは古くはマレー半島に接近し、また仏教時代はジャワにさきがけてその文化が栄えたと思われまふ。その他非常に多くの地域(島々)の、例えばジャワ島から遠くないスマバワ島、フロレス島、チモール島等々、ジャワやバリ等とはその民家を見る限りにおいてもかなり異質な文明を持つことを考えるなら、まずそれぞれの特異性を見るのが重要だと思われまふ。



写真1 ポゴール宮殿前の庭園

なって分かったのですが、年末から年始に渡る時期は、米の端境期の秋を過ぎてイスラム教徒の正月と重なって、物資の需要が急増するためインフレが急速に進む時期でした。それに輪をかけて連日のデモ騒動があったわけです。

白タクを雇ってバンドンに向けてジャカルタを出発した日には、10月頃に始まり翌年の6月頃まで続く雨季の雨も1日中なく、快晴でそよ風の吹く気持ちの良い日でした。椰子の並木の通りを宮殿と熱帯植物園で有名なボゴールを過ぎて海拔3010mのグヌングデ Gunung Gude (大きい山の意味)の中腹のプンチャクパスを越えてバンドン市への180kmの旅は、もし道中の各所で銃を持った兵士やポリスマンが車を止めることがなかったなら、この上もなく快適な旅だったに違いありません。……それほど、野山の緑は美しく空は澄んでいました。途中の果物の産地チビヌン、ボゴールや良質米の産地チアンジュールの沿道はごみが多く、臭くて、初めての私には決して快くは見えませんでした。それはかえって異国情緒を増すものでした。さきほど乗り込んで来たスカイブルーのベレー帽を被った若い兵士も私がドリアンについて尋ねるとすぐに、山の中であつたにもかかわらず車を止めて買って来て、それをナイフで切り開いてくれました。また彼は運転手と共に私を目

的に届けた後、自分達は友達同志であることを説明し、他人の車に乗り込む非礼を犯したことを詫びて丁寧に礼を言って帰って行きました。……ここまでの挿話を今しばらく象徴的に解していただけるとすれば、その時の私の心の中の明と暗、楽と苦の気持ちの並存状態が説明出来るかと思います。それは天が抜けるかと思われるほど晴れ上がった熱帯の空からにわか大雨を降らすスコールのような。彼らの経済生活においても、どん底にあってむしろ楽天的でした。

ところで、ジャワ島内の交通は国鉄でも私営の長距離バスでも、また、トラックを木造で改造した中距離用のバスやスプルベンと言う名の、ジープ・小型トラック等を改造した約10人乗りのものでも、実によく走っています。しかし、安全性に関しては非常に心配です。鉄道は第一、地盤が弱くその構造が粗末な上にかなり古くて管理も悪いからです。ですからディーゼル機関車の引く急行列車でも蒸気機関車でも鉄橋やトンネルにさしかかる度に停止して、それからゆっくり通過する様子は乗っていてさえ滑稽です。バンドンージャカルタ間の180kmを4時間半で走ります。この間はむしろスプルベンのほうが便利です。少し料金は高くなりますが、4時間くらいで飛ばし、そのうえ家から家まで客を運んでくれる利点があるからです。約35人乗りの木造バスは荷物を積み過ぎる上に構造的に充分でないので事故も多かったようです。特に山と谷の多いバンドン周辺では道や橋の構造も自動車向きでなくて、バスのブレーキが効かないためそのまま30mくらい下の谷川に転落して乗客全員死亡の事故を起こしたこともありました。

ジョクジャカルタからバンドンに帰ろうとした時、たまたま雨季の大雨のために1カ月くらい鉄道が不通になったことがあります。

その時に、この区間に3種類の夜行長距離バスのあるのを知りました。一つは兵士の護衛つきで枕もついた最新式の極上のもの、もう一つはプムダエクスプレスと言う名のベンツ社製の少し型の古いバスです。私はこれを利用しましたが、これは鉄道の通っている内陸部を避けてジョクジャカルタから北進してマゲランを通りスマランに出て海岸沿いに一路西進してチルボンまで進み、再び山に入ってバンドンに行くものです。その所要時間は約13時間です。ついでながら、このバスは大急ぎの郵便物を頼むと先方の家に翌日には届けてくれるシステムになっています。ただし料金は速達郵便料の4倍くらいだったと思います。

時間の点ではすべての交通機関が出発地や目的地での危険防止のために、早朝3時ないし6時頃に出発して遅くとも夕方8時には目的地に着くように、また、ノンストップのバスの場合は夜行で走るように、うまく出来ています。

最後に市内では、ジャカルタで以前から、バンドンの場合には1967年10月からバスが運行を始めました。ジョクジャカルタではそこが中距離の木造バスのターミナルになっているおかげで市内でもそれが利用出来ます。ジョクジャカルタとソロの街ではその由緒ある街の風景にふさわしく四輪馬車が走ります。



写真2 中部ジャワの四輪馬車

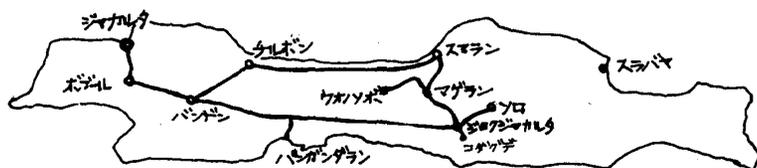


図1 ジャワ島内で私が通った道

一般にどこの町でもベチャと言う名の輪タクが沢山ありますが、起伏の多いバンドンの街では長い距離はこのベチャを乗りつぐこともあり、また、オポレットと言う名のスプルベンよりもっと悪く狭い汚れた車で街の中を数系統のルートで走っているものもあります。これはベチャやドッカール（二輪馬車）より安価でしかも速いので便利です。

建築学科を持つ国立大学について

例年9月に新学期が始まるインドネシアの大学は、1966年のデモ騒ぎで、翌1967年1月に始まることが決定されました。しかしそれにもかかわらず未だ学内の平静を取りもどすに至らず、3月に入ってやっと入学試験をして、新学期の講義が再開されたのは4月に入ってからでした。従って1967年は1学期と2学期の中間の休暇を返上してスケジュールのつまった忙しい年でした。その間は学校によって差があったようです。

ここで建築関係の学科を持つ国立大学を列記しますと、

1. バンドン工科大学 Institut Teknologi Bandung : バンドン
2. インドネシア大学 Universitas Indonesia : ジャカルタ
3. デポヌゴロ大学 Universitas Deponegoro : スマラン
4. ガジャマダ大学 Universitas Gadjamada : ジョクジャカルタ
5. スラカルタ工科大学 Institut Teknologi Surakarta : ソロ
6. ウダヤナ大学 Universitas Udayana :

バリ島デンパサール

7. ハサヌディン大学 Universitas Hasanudin : セレベス島マカッサール

バンドン工科大学は1921年オランダ政府によって工業専門学

校 Technisch Hoog School として創立されて、建築学科は1951年に始まりました。インドネシア大学は1924年に法科大学が、1927年に医科大学が創立されて、建築学科は工学部と共に新しく、1965年に始まって、まだカリキュラムも完備していませんでした。ガジャマダ大学はジョクジャカルタのハマクブオノ家が侯の子弟を教育していた歴史を持つもので、歴史のある中部ジャワの地の利を得てすぐれた大学です。その建築学科もバンドン工科大学を卒業した優秀な若手の人達が教鞭をとっているものです。なおバンドン市にはカトリック系の私立大学パラヒアンガン大学があって建築学科を持っています。

バンドン工科大学

その歴史は前述のように、1921年にオランダ政府による工業専門学校 Technisch Hoog School として創立され、1943年～45年の日本軍による統治時代を経て、1945年～49年には再びオランダ政府の下でインドネシア大学に属し、1949年～59年にはインドネシア新政

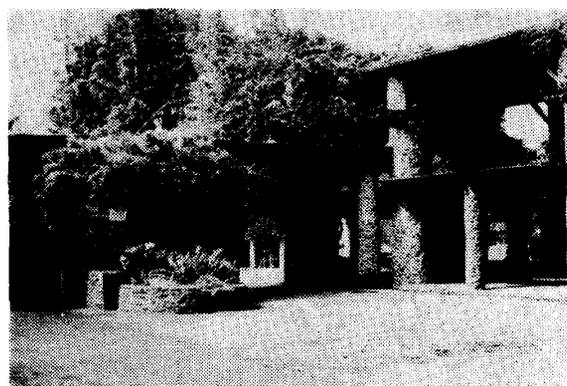


写真3 バンドン工科大学正門



写真4 前面の建物の一部。もっとも高いのが図書館，手前の列は機械工学部。左後方に正門を通る南北の軸線に関して対称の位置に同じ建物が見える。

府によるインドネシア大学に属します。その間、1951年に建築学科が開設されます。1959年には大統領スカルノが母校のバンドン工学部を訪れた際に盛大な祭典が催され、その宣言によってバンドン工科大学としてインドネシア大学から独立します。その時の様子は、演説集等が写真入りで出版されていますので分かると思います。この年1959年には、国連の援助によって地域・都市計画学科 Department of Regional and City Planning が開



写真5 中央ホール内部

設されて、芸術学科 Department Sini Rupa と建築学科 Department Arsitektur と共に芸術・計画学部 Fakultas Sini Rupa dan Merentjanaan として一学部を形成します。そして1967年には第1回創立8年祭 Swindun と建築学科の15年祭が催されました。

学部は

1. 土木工学部
2. 機械・電気工学部
3. 数学・物理学部
4. 鉱物工学部
5. 化学・生物学部
6. 応用物理・化学工学部
7. 芸術・計画学部

の7学部で、教員数約300人で、そのうち教授17人、学生総数約5000人です。

建築学科の教科内容について

いわゆる一般教養科目は、語学すなわち、ドイツ語等は高校で修得する関係上英語のみ、そのほかに社会学や心理学のほかはほとんど課されず、1年生の最初から設計製図とモデリングを含む専門科目が課せられます。なお地域・都市計画学科の場合は、“Principles of Planning”, “Urban Sociology”, “Religion”, “Planning Administrative”, “Land Economics”, “Industrial Location”, “Resources”, “Planning Statistics”, “Sampling Technic”



写真6 建築学科

等が修得されます。

その他に週2時間の軍事教練 Kemiliteran と4年生にパンチャシラの学習が課されます。2年生の間には3カ月間の学外実習があってそれを終えるとバチェラーの称号が与えられてそのまま卒業する学生も少数いると聞いています。なお各学科目には、1時間の授業（それが普通ですが）に対して1時間の図書館学習と1時間の自習が義務づけられて、3時間で1単位ということになっていますが、教科書も、まして参考書もそろわない状況ではその規則も名目的でしかないようです。4年生に進んだ学生はその年に6カ月間の学外実習を完全に学校を離れて主に公共機関で行ない、そこで将来の卒業研究の見通しを思索しながら実務を行ないます。その時に少し給金をもらう学生もあり、また、卒業後の就職

の約束をする学生もいたようです。そして5年生で卒業設計とそのための調査研究をします。その際教師の側では2～3人でチームを作り、そのチームで1人または2人の学生の指導をします。テーマの選定はすべて実在のロケーションとシチュエーションを選んでなされるので、港湾や空港関係をテーマとする学生は主にジャカルタに、農業研究所とそれに関連した工場をテーマに選ぶ学生は主にボゴールまたは自分の出身地の外領の島等へという具合に、数カ月間出かけて調査をすることがあったようです。卒業のためにはこの調査レポートを含む卒業設計がもっとも重要視され、その採点は非常に厳格なために毎年50～60人の新入生に対して卒業生は10人前後です。

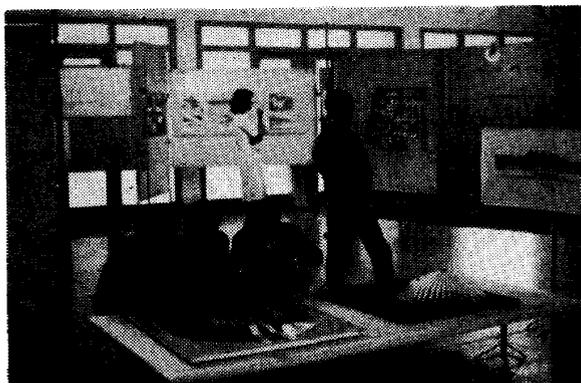


写真7 学生の作品

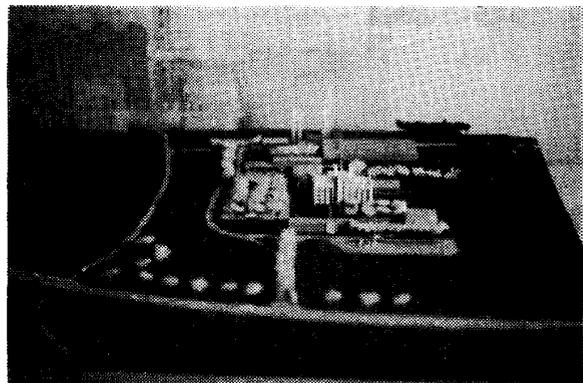


写真8 卒業設計



写真9 芸術学科の廊下



写真10 版画科

中部ジャワのヒンズー・仏教寺院 遺跡について

中部ジャワの歴史についてはまだ不明確な点が多いようです。その理由は第1にインドネシアに古い史書がないことです。モジョパイ Madjapahit 王朝 (1294~1520) のもっとも盛んだった ハヤムヴルク Hayam Wuruk 王の治世 (1350~1389) に書かれた叙事詩 Nagarakertagama にしても、その記事が東部ジャワ時代 (927年頃から) で、しかも東部ジャワに関するもののみのようです。²⁾ 第2に碑文等に年代、王朝と王名等出現するが、それらを完全に連続させるには充分でない。第3に古くはインドと中国に少数のジャワに関する記事があるがそれらも上と同じ状態である。等の理由によって、いちおう年代史は出来上がっているにもかかわらず、現在なお異説が多く出ているようです。例えば、仏教文化がもっとも栄えてボロブドゥル Borobudur はじめカラサン Tjandi Kalasan, パウォン Tjandi Pawon, ムンドゥ Tjandi Mundut, セウ Tjandi Sewu 等の各寺院を建築したとみられる シャイレンドラ Shailendra 王朝 (778年頃~864年または927年頃)³⁾ について

- 2) 私が現地で見つめた Nagarakertagama についての研究は現代インドネシア学者による政治学的な研究の小範囲のものでした。この点に関しては、N. J. Krom, *Beschrijving van Borobudur*. 1920; 井尻進『ボロブドゥル』上海, 1924; 千原大五郎『ボロブドゥルの建築的研究』1967(京大学位論文); Beruhard H. H. Vlekke, *Nusantara, A History of Indonesia*. Hague and Bandung, 1959 にも述べられている。
- 3) 778年(サカ紀元700年)は Tjandi Kalasan 出土の碑文中の Panangkarana 大王がターラ女神のために寺院を建立したことが記録されるその年号に基づいたもの。Panangkarana 大王については別に907年(サカ紀元829年)の年号を持つ Kédu 出土の銅板によって、サンジャヤ Sandjaja 王の子で、シャイレンドラ Shailendra 王朝の王であることを知る。

さえその起源は明確でないようです。その王朝は7世紀頃からスマトラ南部のパレンバンを中心とする シュリヴィジャヤ Shrividjaja 王国⁴⁾ の拡大した領土内であるというシュリヴィジャヤ王国説が古くから通説だったようです。その説の第1の根拠は、仏教を信仰するシュリヴィジャヤ王国が8世紀にその領土を著しく拡大したという事実、第2にシャイレンドラ王朝の王達が、スマトラのシュリヴィジャヤ王国と同じ仏教の信者であること。そのことからシャイレンドラ王朝の諸王に先立つサンジャヤ Sandjaja 王(シヴァ教信者でディエン高原 Dieng Plateau の寺院群の建立者であると普通考えられている)は東部ジャワへ移ったとする。等の理由によるものです。また、シャイレンドラ王朝の起源についてはジャワを支配していたカリंगा Kalinga 国⁵⁾ に由来するという説もあるようです。それはマゲラン Magelang 近くのムンティラン Muntilan 南方、チャンガル Tjanggal 出土のサンジャヤ Sandjaja 王の建立した碑文で、732年(サカ紀元654年)の年号を持ち、サンジャヤ王の父のサナハ Sanaha 王が南インドのクニャラ・クニャラ村からジャワに来て建国したという記録と、これと同じ旨の南インドのカリंगाの王が2万人の総勢をひきつれて中部ジャワに移住して来たという伝説⁶⁾ に基づいているものようです。それに反し次の四つの資料を根拠にシュリヴィジャヤ Shrividjaja 王朝は、ディエン高原のシヴァ教寺院群を建立したサンジャヤ Sandjaja

- 4) 義浄の南海寄帰内法伝(大正蔵第54卷)に「末羅遊州即今屠利逝国」と出てくる。(証聖元年, 695年の頃)
- 5) 旧唐書197(貞観14年, 640年の頃), 義浄大唐西域記等に「訶倭国」として出現。
- 6) 田村隆照「ボロブドゥル彫刻の周辺」『仏教芸術』58 毎日新聞社 参照。

王を継ぐものであるという説⁷⁾があるようです。その四つの資料は、

(1) 前述のチャンガル出土の碑文(732年)：サンジャヤ Sandjaja 王の建立で、インドからサナハ Sanaha 王が来て建国

(2) カラサン出土の碑文(778年)：シャイレンドラ Shailendra 王朝の Panangkarana 大王がターラ女神のための寺院建立

(3) ケルラク Kélurak 出土の刻文：シャイレンドラ王朝のダラニンドラ王の文殊像建立

(4) ケドゥ Kédu 出土の銅板(907年)：サンジャヤ Sandjaja 王に次いでパナムカラナ大王から最後のバリツン王に至る8人の王の名を記す

等のものであります。なお事態をもう少し複雑にする記事があります。それは、サンジャヤ Sandjaja 王に代表される時代すなわちシャイレンドラ Shailendra 王朝以前に、ディエン高原 Dieng Plateau のシヴァ教の寺院群(現在8棟が残っている)は建設され、それは時間的にボロブドゥル Borobudur をはじめとする仏教建築に受け継がれたのだという一般的な考えを否定して、その銘文は809年以前のものではないとするジャンヌ・オーボウィエ教授⁸⁾のものであります。そうすると中部ジャワのカラサン Tjandi Kalasan (女史はなお、Kalasan 出土の778年の碑文は現在の堂の中に包まれるもっと古い堂に関する記事で、現在の堂は850年以前ではないと言う)、パ

7) 前書において田村隆照氏が河本敦夫「ボロブドゥルの浮彫(一)」(『密教研究』89, 1944)に賛同した説です。さらに田村氏は河本教授の労作は「密教的大乗仏教の教理をさぐる」として「印度教と仏教とがこのジャワにおいてどのような関係において習合され、対立を除去していったか」という考証」と紹介している。

8) Jeanne Auboyer, *Les arts de L'Asie Orientale et de L'Extrême-Orient*. 1964, *Que sais-je* No. 77, 真鍋俊照訳『東アジアの美術』1965, 文庫クセジュ 388, 白水社。

ウォン Tjandi Pawon, ムンドゥ Tjandi Mundut, セウ Tjandi Sewu 等の仏教建築を引き継ぐのはディエン高原(シヴァ教)とプランバナ(ヒンズー教)の建築だということになります。建築の表現を見て、カラサン Tjandi Kalasan (仏教で、778年の年号を根拠に中部ジャワの仏教建築中最古と考えられている)はそのすっきりした上方への志向的表現においてプランバナ(ヒンズー教 Tjandi Loro Djonggrang)に通じるものがあり、ディエン高原のものはそのシルエットにおいて東部ジャワ(中部ジャワに次ぐ年代)につながるものを持っているようにも思える。そしてボロブドゥルの隆起した丘の地盤を利用してさえ、そしてあれほど豊かな表現を可能にした文明をもってさえ、その高さ40mの構造物に改造を余儀なくするほどの失敗⁹⁾を犯した技術者達は、内部にせり上がった成の高い室を持つ高さ47mのあのプランバナの Tjandi Loro Djonggrang のシヴァ神のための堂を建設する前に、たとえ小規模であってもカラサン Tjandi Kalasan のような成の高い、内部にせり上がった室を持った堂の経験を必要としたかもしれない。たとえ彼らがそれ以前にインドにおいてもっと困難な仕事に成功していたとしても、ここインドネシアにおける条件は別だっただろう、とも思えるのです。しかし、ディエン高原のビマ Tjandi Bima はその表現においてインドネシアにあってはただ一つ特異で南インドに直接に通じている感じもします。また、以前の堂を新しいより大きい堂が包むことはインドと同じであったかどうか、それは発掘による裏付けを必要とするでしょう。そしてインドネシアにおける宗教史の注意深い研究も、また建築表

9) その最下段には、前面にはるかに出た現在の基段の内側に未完成の浮彫を持つ基段が発見されたことから工事の途中で設計変更がなされたと考えられている。

野口：インドネシア留学から帰って

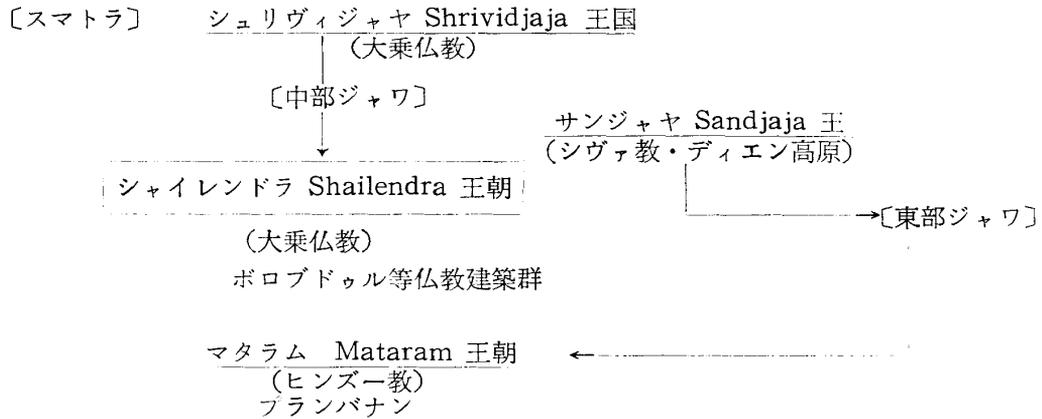


図 2 シャイレンドラ王朝の起源：通説

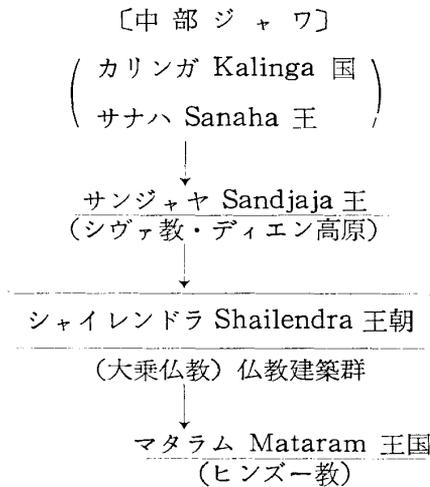


図 3 シャイレンドラ王朝の起源：サンジャヤ王系説

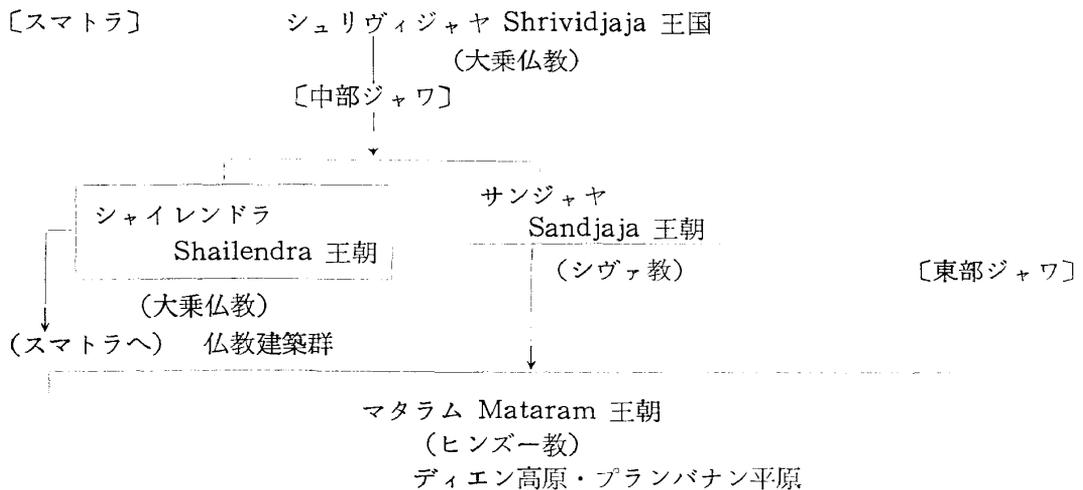


図 4 シャイレンドラ王朝の起源：ジャンヌ・オーボウィエ説

現や技術の面の詳細な調査もかかる事実を発見するのに助けとなることを思えば、まだ結論出来ないように思えます。

ジャンヌ・オーボワイエ教授は、シャイレンドラ王朝について、シャイレンドラ王朝とサンジャヤ Sandjaja 王朝（多分中部ジャワの南部マタラム出身と言う）とは同時代または継続した二つの王家によるもので、共にスマトラのシュリヴィジャヤ Shrividjaja 王国の二つの王朝であるとし、シャイレンドラ王朝の起源についてはシュリヴィジャヤ王国起源説をとりながらも別の新しい見解をとっています。すなわち、850年頃サンジャヤ Sandjaja 氏のある王女がシャイレンドラ Shailendra 氏の一族と結婚した。そしてその10年後にはシャイレンドラ氏が対敵の手に中部ジャワを放棄してスマトラに引退し、そこでインドとの交渉を続けた。中部ジャワに残ったサンジャヤ Sandjaja 氏はマタラム Mataram 王朝の名で中部ジャワと東部ジャワを統治する。すなわち、サンジャヤ王朝、シャイレンドラ王朝時代から、たぶん同じ中部ジャワ出身の別の一王朝が支配していた東部ジャワに食い込んで行くとしています。

ここで歴史的事実の追求の意義をいま一度反省するなら、『現実の容認』¹⁰⁾という文化の受容と発展における一形態がここにも真に適用されるのかどうかという疑問、そして仏教・ヒンズー教を培う段階での彼らの世界観、

- 10) この語は中村元『東洋人の思惟方法3』春秋社、1964の中で仏教の受容形態にあらわれた日本人の思惟方法に関する記述に使用されたもの。インドネシアにおけるヒンズー仏教、そしてイスラム教の受容の仕方について、それらを土着の考え方も含んで柔軟に総合的に吸収していった事実を多くの学者が指摘してきた。このことは現地の人々も認めている。
- 11) かかる観念が建築的に表現されたという前提を立てることは極めて危険だと思われる。従って、表現の内部構造についてはもっと注意深い考察を必要としよう。

その観念の建築における表現方法¹¹⁾を実証せんがための予備作業であると思います。通説で、中部ジャワ最古だと言われるディエン高原のシヴァ寺院群がどう仏教建築群につながり、そしてプランバナナ Plambanan Complex に代表されるヒンズー寺院群につながって行くかという疑問、それと並行して別の関係が浮かび上がって来るかもしれません。何度か盆地に散在する寺院に立ってそれらを見通した時、ヒンズー教のロロジョングラン Tjandi Loro Djonggrang の境内で、その北方にあたかもこのロロジョングランを含んで互いに配置関係を持つかのようにして位置する仏教寺院セウ Tjandi Sewu、プラオサン Tjandi Plaosan 等のことを思い、さらに今も石を切り出しているその南方のラトゥ・ボコ Ratu Boko の宮殿跡の丘をながめ、この丘に登っては今歩いて来たこの寺院群をながめて、また仏教のカラサン Tjandi Kalasan に下ってはやはりこの丘をながめながら、国道を隔てたサリ Tjandi Sari を思い描いてみた時、古代人達は仮にこれらの寺院群に直接的な機能関係がなかったとしても、新しい寺院を建設する度に新しい寺院群の配置における構造関係を構想してみることがなかったであろうかと思ってみたものです。

いま少しジョクジャカルタ周辺概念図を見ながら前述の遺跡群の分布を見たいと思い

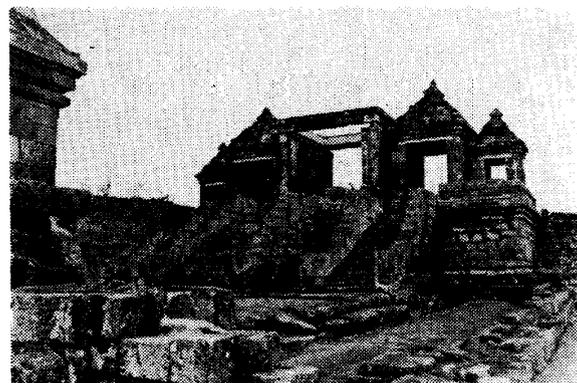


写真11 ラトゥ・ボコ



図5 フランバナンの周辺



写真12 ロロジョンگران

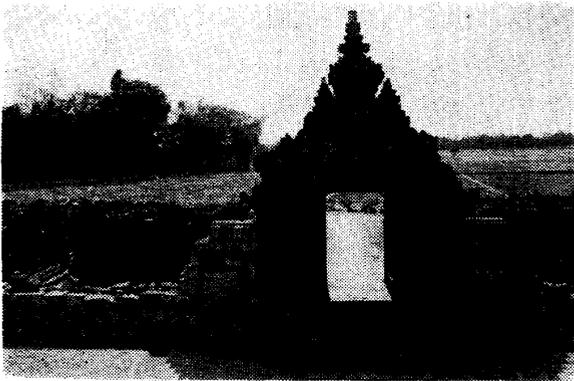


写真13 プラオサン境内から西方を見る

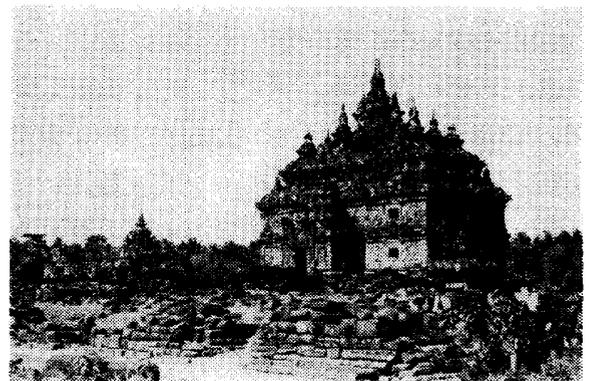


写真14 プラオサン



写真15 ボロブドゥル

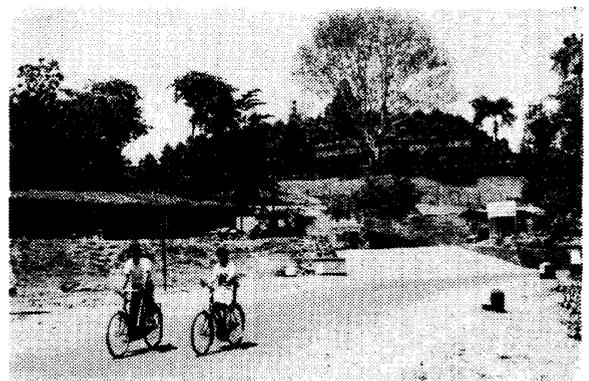


写真16 ボロブドゥル正面

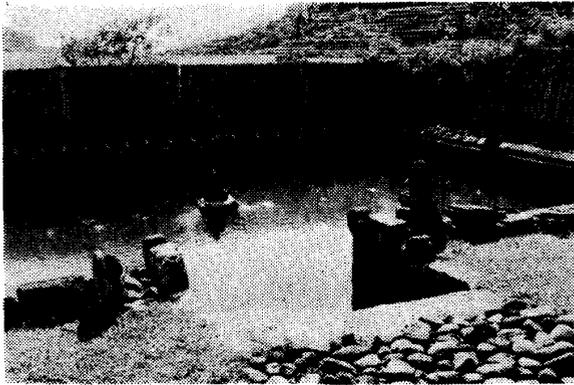


写真17 ウンブル

ます。

ジョクジャカルタ市から マゲラン Magelang 行きの例のトラックを改造した 35人乗りの木造バスで北北東に約 35km の位置、ムンティラン Muntilan の町で、少し小さいバス、ボロブドゥル行きに乗り替えて国道を離れて田圃の中を西南西方に約 10km 走る。そこがムンドゥ Mundut 村です。ここには Tjandi Mundut があり、中の釈伽三尊の完全さは別としても堂のプロポーシオンは実に美しい。それからプロゴ川の谷を下って再び上るとムンドゥから東方 3 km の地点のブドゥル Budur 村に着きます。バスを降りると前方の丘の椰子の木の間にボロブドゥル Boro-

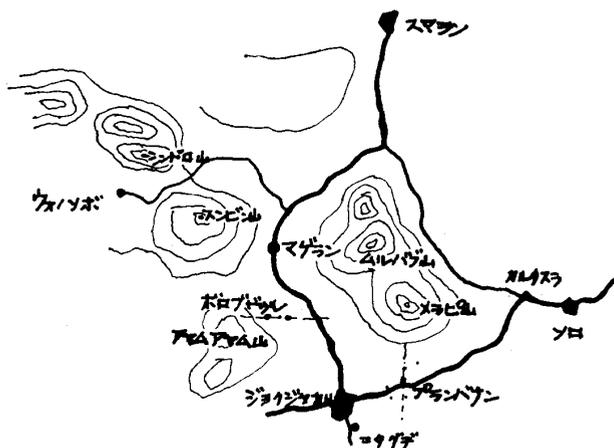


図6 ジョクジャカルタ周辺

budur¹²⁾ が迫っています。このボロブドゥルの上の円台まで登って周囲を見渡すとかなり雄大な一区画が東方のメラピ活火山 (海拔 2912m), ムルバブ山 (3144m), 北方のスミン山 (3373m), 西方のアヤムアヤム山 (1022m) によって限られています。限られているというよりはむしろそれらの個性と謂れを持つ山々を背景とした広い伝説の世界が開けているような感じです。それらの山々は充分高く遠く、シャーベットトーンをしたその山の姿には盆地の静けさに反して何か動きさえ感じるのです。この周辺には沢山の遺跡があります。マゲランで、北方 5km くらいの所に温泉のわく小さい遺跡のあることを聞いて早速行ってみました。国道から 1km 足らず谷に下った田圃の中にウンブル Tjandi Umbul があり、おそらく最初から温泉のわくこの場所に小さい堂を建立したものだだろうと思われました。そこにあるいくつかの彫刻は他のものと大差のない様式を示しているようでした。ジョクジャカルタから右にメラピ山、ムルバブ山の迫るのを見ながら北方 40km のマゲラン Magelang までバスで行き、さらにそこからスプルベンで 10km のスチャン Setjang から北東に入って登り、スミン山 (3373m) とシンドロ山 (3138m) の中間を 50km くらい登った所が高原の町ウォノソボ Wonosobo です。シヴァ教遺跡が現在 8 堂保存されているディエン高原 Dieng Plateau は、この町から 20km 登った海拔 2000m 以上の地点です。現在ここへはウォノソボから

12) 古く、1814年イギリス人東印度会社副総督 Sir Thomas Stamford Raffles の指導で発見されて後、多くの学者達の研究と発掘調査、保存がなされた。オランダ人 Van Erp が、1897年以降の復元工事中に測量器でムンドゥ Tjandi Mundut を覗いた時、それらの中間にあるパウオン Tjandi Pawon が一直線上にあることを発見した。その事と、インドおよび日本の寺院配置を考慮して、ここに伽藍配置を想定したのは、千原大五郎、前掲書、p. 129 である。

毎日1往復のトラックが出ているのですが、私の行った時はそのトラックが故障したということで冷い雨の中を2日間待って果たせず、ウォノソボから引き上げて帰って来ました。このウォノソボおよびディエン高原に入るためには一定の機関の証明書が必要で、それを知らず町に入った私は警察との交渉が大変でした。

ジョクジャカルタから北西方、ソロ行きのバスで15kmの地点がプランバナナン Prambanan 村で、ここにロロジョングラン Tjandi Loro Djonggrang をはじめその周辺に前述の寺院群があります。セウ Tjandi Sewu にしても、プラオサン Tjandi Plaosan にしても、その他沢山の堂が、あるものは仏像を含んで、おそらく風雨と時に地震のために崩れ落ちたままになっています。プラオサンだけは3室の連続した堂1棟だけが復元されています。

プラオサン村から2頭の白牛が引く大きな牛車に便乗して3kmほどジョクジャカルタ側に帰った所がカラサン村で国道を10kmほど入って道からすぐ見える所に Tjandi Kalasan があります。堂の上部と背後の室が崩

れ落ちていますが、背の高く美しい建物だと思います。国道を隔てて火山灰のぼこぼこ道を北へ入るとプラオサンと良く似た、中が3室になったサリ Tjandi Sari があってよく修復されています。ここからさきほどの国道を田圃の中のまったく平坦な道を北東へ40km 進みスラカルタ Surakarta (ソロ)の古い町であるカルタスラ Kartasura に出て、さらに東に10kmの地点が、あの広々とした感じのソロです。

ソロとジョクジャカルタのクラトン建築について

中部ジャワのイスラムのマタラム Mataram 王国(1575~1755, 古く864年頃のマタラム王朝の末裔かもしれない)は、1755年にスナン領スラカルタ Soesoeningebied Surakarta (パクブオノ家)とスルタン領ジョクジャカルタ Sultanaat Jogjakarta (ハマンクブオノ家), それにソロのマンクヌガラン領 Mankoenagaran とに3分されます。オランダ統治政策による地方分権法(1903)と東インド国家組織法(1925)の2法によってジャワ島内は、3直轄地と2自治領に分類され、

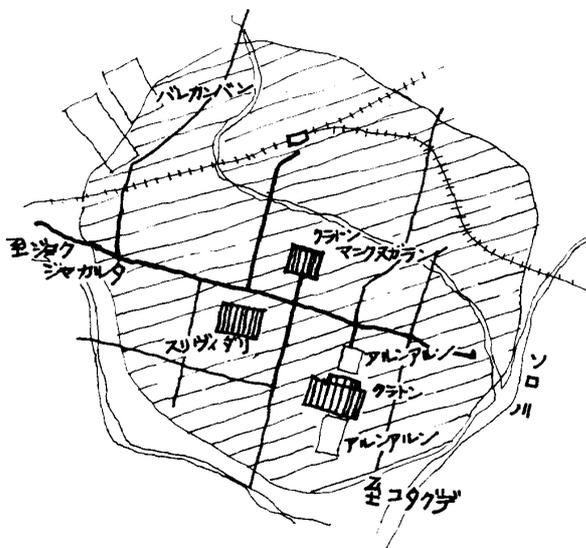


図7 ソロ市概念図

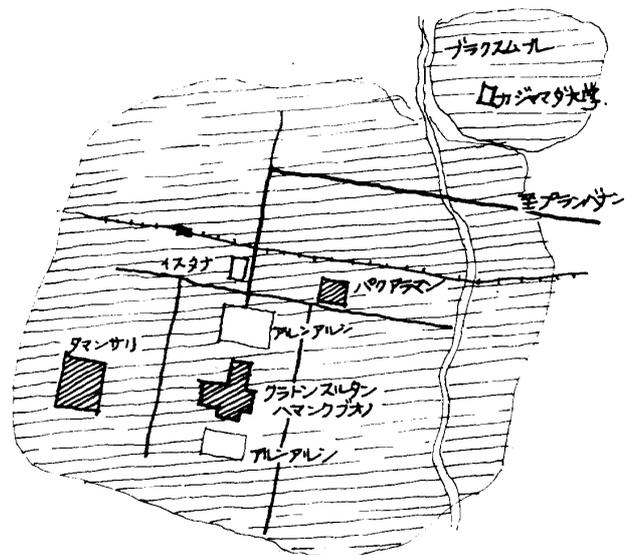


図8 ジョクジャカルタ市概念図

このスラカルタとジョクジャカルタがその二つの自治領です。その侯の邸宅すなわち多くの従者・工人達の職場や住宅に至るまで含むかなり大きな一区画、それがクラトン Kraton

と呼ばれるものです。ジョクジャカルタにはもう1家、パクアラマン Paku Alaman 家があって、オランダの植民政策によって各2家ずつを対立させたものだということです。ハマクブオノ家は最大で、古くは野外の大浴場や、水を建築群の内部に配したり床の下に流したりした水宮と呼ぶ離宮を持っていたようです。この水宮は今は放棄されてタマンサリ Taman Sari (公園の意味) という遺跡になっています。現在でも、アルンアルン Alun-alun (広場) に面したプンドポ pundopo (接客用の大広間) をガジャマダ大学の法経学部に開放し、博物館と図書館をその北に持っているほどです。邸内には伝統衣装を着けた多くの従者達が各々の持場を守っています。私達が何かものを尋ねるとジャワ語の宮殿語—それは丁寧で耳に非常に快く響くものですが—でゆっくり説明し、また数十人の楽士達が奏するガメラ音楽が静かに流れています。これらの邸には、あらかじめ権威筋の紹介状を持って許可を取っておけば一定の場所に限り見せてくれますが、特にソロのマクヌガラン家では Prince Raditio 氏の御好意で、侯の寝所に至るまで見せていただくことが出来ました。

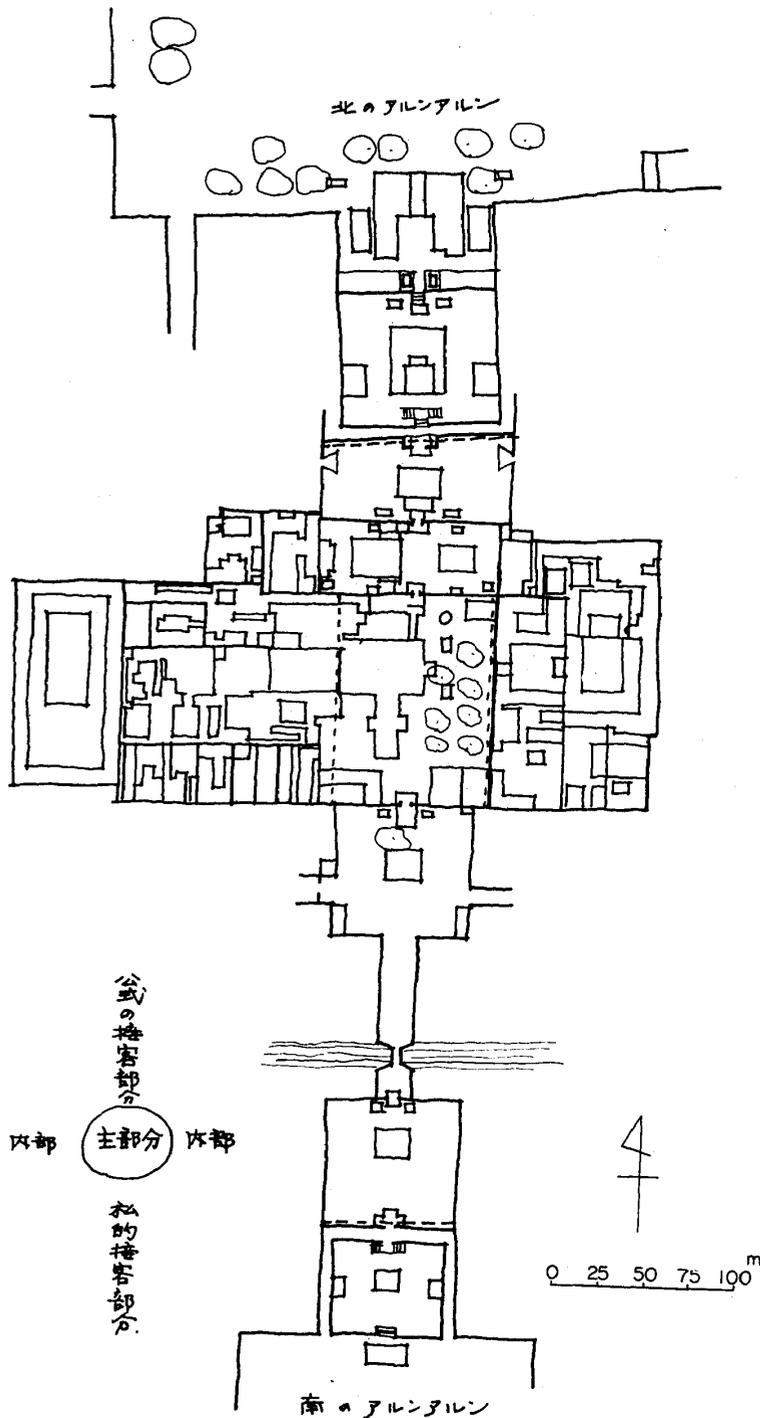


図9 クラトン・スルタン・ハマクブオノ配置図



写真18 クラトン正面

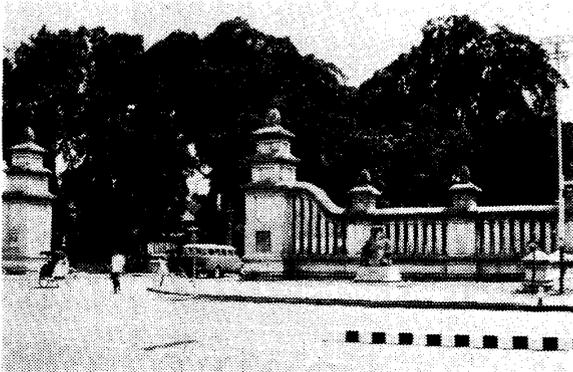


写真19 ソロクラトンススナン正面

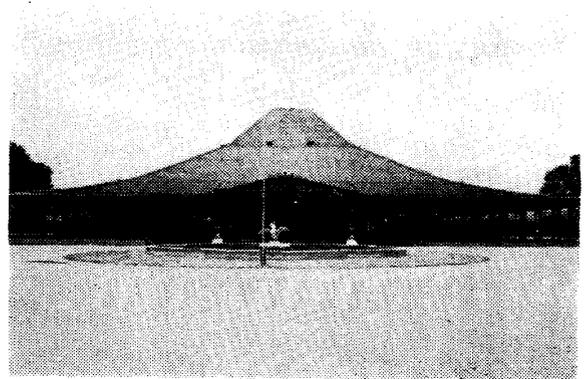


写真20 ソロマンクヌガランの正門プンドボ

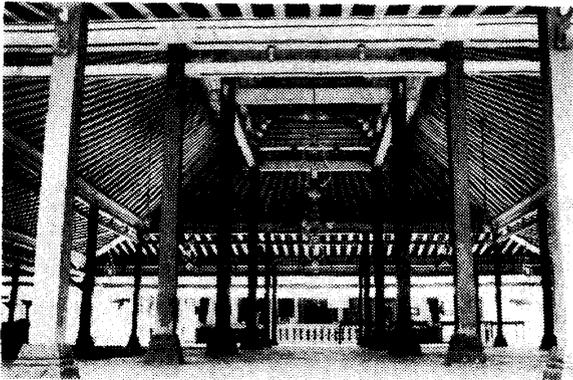


写真21 プンドボ内部

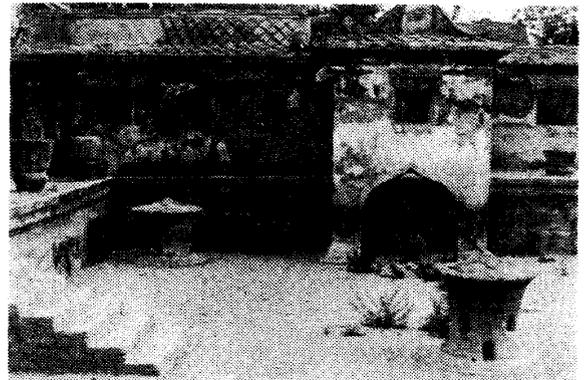


写真22 ジョクジャカルタ、タマンサリの
野外大浴場

む す び

バンドン、ジャカルタ、ジョクジャカルタの都市計画等に関して、去る3月7日京大東南アジア研究センターの研究例会で報告したことの一部はここで省略しました。

最後に、関係の各位に、またバンドン市でほとんど1年間家族同様に私の身の回りのことをお世話下さった今井忠治先生御夫妻に、紙上をもって御礼申し上げます。